藤崎遺跡15

－藤崎遺跡32次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第824集

2004

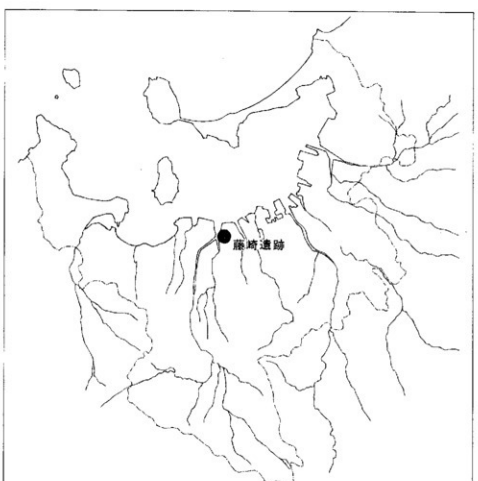
福岡市教育委員会

FUJI SAKI

藤崎遺跡15

－藤崎遺跡32次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第824集



藤崎遺跡32次　調査番号　0237
遺跡略号　FUA-32

2004

福岡市教育委員会

1．1区全景（南から）

2．明治45年出土　三角縁複波帯盤龍鏡

序

福岡市には豊かな自然と先人によって育まれた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現在に生きる我々の重要な務めです。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は、平成14年度に実施した共同住宅建設に伴う藤崎遺跡32次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行まで、多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対しまして、心からの謝意を表します。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 生田征生

例　言

1．本書は共同住宅建設に伴い早良区藤崎１丁目12-1、2外において平成13年10月１日から同14年１月31日に発掘調査を実施した藤崎遺跡第32次調査の報告である。
2．本書に使用した方位は磁北で、座標北から６°21′西偏する。
3．本書に使用した遺構の実測は藏冨士寛、赤坂亨、調査担当者が、遺物は久住猛雄、濱石正子、濵養久美子、平川敬治、担当者が行った。挿図の製図は長家伸、大塚紀宣、阿部泰之、副田則子、安野良、成清直子、斉藤貴代子、濱石、濵養、担当者が行った。写真撮影は遺構を担当者が、遺物を平川が行った。
4．本書に用いた遺構記号はST：甕棺、SR：木棺墓・土壙墓、SQ：石棺墓、SD：溝、SK：土坑である
5．出土人骨の取り上げは九州大学中橋孝博氏を始めとし板倉有大、岡崎健治、重松辰治が行った。
6．本書の作成にあたり上田栄子、窪田恵、當阜苗、前田みゆき、安永令子の協力を得た。
7．SK237出土縄銭の複製作成を木市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎が行った。
8．本章の執筆はⅣ-2-(4)、Ⅴ-1を久住猛雄が、他を池田が行った。巻末には澤田むつ代氏に出土大刀付着の織目、中橋孝博氏に出土人骨、比佐陽一郎に赤色顔料についての分析、論考を執筆頂き掲載することができた。
9．東京国立博物館蔵の明治45年出土遺物の調査では、時枝務氏のご高配を賜り、澤田むつ代氏、古谷毅氏にご教示を頂いた。
10．本書に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。

調査中並びに資料整理、資料収集にあったては上記の他に特に次の方々にご指導を賜った。(敬称略)

李弘鐘　高橋徹　飛野博文　橋口達也　溝口孝司　本市埋蔵文化財課諸氏

遺跡調査番号	０２３７			遺跡略号	FUA-32
所在地	早良区藤崎１丁目12-１，２			分布地図番号	０３０７
開発面積	1724.04㎡	調査対象面積		調査面積	1,101㎡
調査期間	2002.10.1 ～2003.1.31			事前審査番号	14-2-110

本文目次

Ⅰ. はじめに …… 1
Ⅱ. 調査組織 …… 1
Ⅲ. 立地と環境 …… 1
Ⅳ. 調査の記録 …… 5
1. 調査の概要 …… 5
2. 古墳時代の墳墓 …… 5
(1) 1号周溝墓 …… 5
(2) 2号周溝墓 …… 10
(3) 3号周溝墓 …… 12
(4) 周溝墓出土古式土師器 …… 12
3. 弥生時代の墳墓 …… 16
(1) 墓域 …… 17
(2) 甕棺墓 …… 18
(3) 木棺墓・土壙墓 …… 29
(4) 石棺墓 …… 37
4. 溝 …… 42
5. 住居跡 …… 43
6. 土坑 …… 48
7. その他の遺構と遺物 …… 48
Ⅴ. おわりに …… 50
付　論　1　藤崎遺跡出土の素環頭大刀に付着する織物
（東京国立博物館　澤田むつ代） …… 52
2　藤崎32次調査出土の赤色顔料について
（福岡市埋蔵文化財センター　比佐陽一郎） …… 53
3　福岡市藤崎遺跡32次調査出土の人骨
（九州大学大学院比較社会文化研究院　中橋孝博） …… 55

挿図目次

付図　遺構全体図(1/100)
Fig. 1　遺跡位置図(1/25000) …… 2
Fig. 2　調査地点位置図(1/4000) …… 2
Fig. 3　調査区位置図(1/1000) …… 2
Fig. 4　調査区全体図 (1/200) …… 4
Fig. 5　東壁土層模式図(1/60) …… 4
Fig. 6　1号周溝墓(1/200) …… 6
Fig. 7　SD001、010出土遺物出土状況(1/80) …… 7
Fig. 8　主体部SK012実測図 (1/40) …… 8
Fig. 9　明治45年出土箱式石棺蔵骨遺物 (1/2.30) …… 9
Fig.10　SD010・098、SK318出土遺物実測図 (1/4) …… 10
Fig.11　2号周溝墓実測図 (1/100.40) …… 11

Fig.12 3号周溝墓実測図（1/100.80）……12
Fig.13 周溝出土土器実測図1（1/4）……13
Fig.14 周溝出土土器実測図2（1/4.3）……14
Fig.15 周溝出土土器実測図3（1/4.2）……15
Fig.16 1区弥生時代墳墓配置図（1/100.80）……17
Fig.17 SD047出土遺物実測図（1/3）……17
Fig.18 2区弥生時代墳墓配置図（1/100）……18
Fig.19 甕棺墓実測図1（1/30）……20
Fig.20 甕棺墓実測図2（1/30）……21
Fig.21 甕棺墓実測図3（1/30）……22
Fig.22 甕棺墓実測図4（1/30）……23
Fig.23 木棺・土壙墓実測図1（1/40）……24
Fig.24 木棺・土壙墓実測図2（1/40）……25
Fig.25 木棺・土壙・石棺墓実測図3（1/40）……26
Fig.26 出土甕棺実測図1（1/10）……27
Fig.27 出土甕棺実測図2（1/10）……28
Fig.28 出土甕棺実測図3（1/10）……29
Fig.29 出土甕棺実測図4（1/8）……30
Fig.30 出土甕棺実測図5（1/8）……31
Fig.31 出土甕棺実測図6（1/8）……32
Fig.32 出土甕棺実測図7（1/8）……33
Fig.33 副葬遺物および彩文土器実測図（1/3.2/3）……34
Fig.34 墓壙出土遺物実測図（1/3）……35
Fig.35 SD001出土弥生土器実測図（1/8）……36
Fig.36 SD010出土弥生土器実測図（1/10.8）……37
Fig.37 SD001.010出土弥生土器実測図（1/3）……38
Fig.38 1区出土弥生土器実測図1（1/3）……39
Fig.39 1区出土弥生土器実測図2（1/4）……40
Fig.40 2、3区出土弥生土器実測図1（1/4）……41
Fig.41 2、3区出土弥生土器実測図1（1/3）……42
Fig.42 SD080.035.091土層実測図（1/60）……42
Fig.43 SD80.123.131.251出土遺物実測図（1/4）……42
Fig.44 SC140実測図（1/60）……43
Fig.45 Fig.46 SC058.108.116.130.150実測図（1/60、40）……44
Fig.46 SC058.062.108.130.140.150出土遺物実測図（1/4）……45
Fig.47 SC116出土遺物実測図（1/4）……46
Fig.48 SK025.100.103.227.237実測図（1/60）……46
Fig.49 SK025.100.227.237出土遺物実測図（1/3）……47
Fig.50 SK237出土餓拓影（3/4）……47
Fig.51 その他の出土遺物実測図（1/4.3.3/4）……49
Fig.52 藤崎遺跡方形周溝墓分布（1/1500）……51
Fig.53 藤崎遺跡出土甕棺墓分布図（1/1500）……51

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

平成14年５月23日付けで西日本鉄道株式会社代表取締役明石博義氏から早良区藤崎１丁目12-１，２における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査願（事前審査番号14-2-110）が提出された。当該地は藤崎遺跡内に位置し、周辺では弥生時代の甕棺墓、古墳時代の方形周溝墓が確認され、申請地内では明治45年に箱式石棺が出土している。そのため埋蔵文化財課は平成14年６月18日に試掘調査を行い、甕棺、溝等の遺構を確認した。これをふまえ、埋蔵文化財課と西日本鉄道株式会社との間で協議を行った。その結果、建物建設の基礎工事等で遺構の破壊が避けられない部分について発掘調査を行い、記録保存を図ることで両者の協議が成立した。以上の協議を受けて西日本鉄道株式会社代表取締役明石博義氏との間で委託契約を締結し、平成14年度に発掘調査、平成15年度に資料整理・報告書作成を行うこととした。発掘調査は平成14年10月１日から15年１月31日までの期間で行った。調査面積は1101㎡である。

現地での調査にあたっては西日本鉄道株式会社をはじめとする関係者、近隣の皆様には発掘作業についてご理解を得ると共に多大な御協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2．調査の組織

事業主体　西日本鉄道株式会社
調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
調査総括　埋蔵文化財課長　山崎純男
　　調査第１係長　力武卓治
調査担当　池田祐司
調査作業　有江美子　阿比留忠義　井上八郎　梅野真澄　岡部静江　海津宏子　木田ひろ子
　　下司昭枝　柴藤清志　辻節了　辻哲也　徳永洋一郎　永島軍俊　西川吾郎　早川浩
　　広瀬梓　細川友喜　松本順子　三谷朗子　安河内史郎　矢野和江　吉川春美

Ⅱ．立地とこれまでの調査

藤崎遺跡は、福岡市藤崎、高取、百道に所在する東西400m、南北650mの弥生時代から中世を中心とした複合遺跡で、範囲は砂丘とその後背地に立地する。明治45年に石棺から三角縁盤龍鏡等が出土して以来、甕棺、石棺等が発見され大正期からその報告が成されるなど、弥生時代から古墳時代にかけての墓地遺跡として古くから注目を集めてきた。その後は昭和52年からの地下鉄建設に伴う調査を契機として、その後のビル建設等に先立って調査を行ってきた。その結果、発掘調査は2003年現在33次に及ぶ。

藤崎遺跡では縄文時代晩期中頃から遺物が見られるが少なく、遺構として確認されているのは５次調査地点の突帯文期の甕棺が最も古い。その後弥生時代には、砂丘の頂部にあたる現在の国道に沿って墳棺墓を中心とした墳墓が連綿として営まれる。甕棺は遺跡の西端に近い猿田彦神社付近に前期のものが集まる。中期になると数が増大し、神社の東側から千眼寺付近まで分布を広げ、区役所前付近に集中する（Fig.52）。後期は２基のみと激減する。古墳時代では方形周溝墓を２次調査で１基、３次調査で９基、４、10、27次調査で一部を確認し、方形周溝墓群とも言うべき遺構が広がる。３次調査の６号方形周溝墓からは三角縁二神二車馬鏡と素環頭大刀等が、７号の周溝からは珠文鏡、４次調査

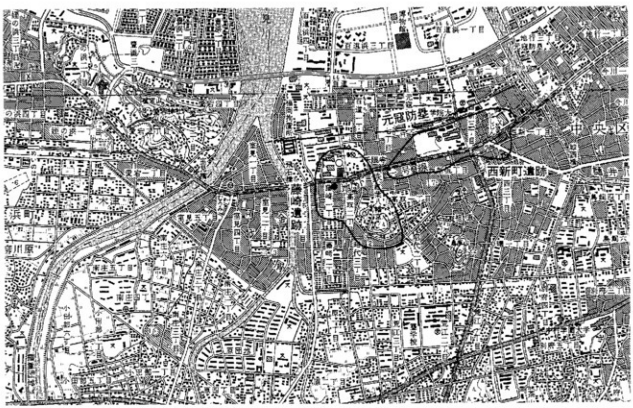


Fig. 1　遺跡位置図(1/25000)

Fig. 2　調査地点位置図(1/4000)

Fig. 3　調査区位置図(1/1000)

10号方形周溝墓からは変形文鏡が出土している。また、1917(大正6)年に石棺墓から方格渦文鏡が出土した27次調査地点では、周溝と石棺墓、土壙墓を検出し、鏡が石棺墓を主体部とする方形周溝墓からの出土ではないかと考えられている。集落跡は、弥生時代終末期が6軒、古墳時代後期のものが確認されている。その後は古代、中世の遺構遺物が確認されている。

藤崎遺跡の東側の同一砂丘上の西新町遺跡では、弥生時代中期を中心とした甕棺墓群、弥生中期から後期、古墳時代前期の集落が分布を移動しながら営まれていた状況が近年の調査で明らかになりつつある。特に古墳時代前期には、外来系の遺物が目立つ特殊な様相を呈している。

今回の調査地点は、明治45年に箱式石棺から三角縁盤龍鏡と素環頭大刀が出土した第1地点として知られ、大正14年の島田寅次郎編 福岡県「史蹟名勝天然記念物調査報告書」第一輯に報告されている。あとの報告でも重要な記述であり全文と写真を引用する。いくつかの旧字体は改めた。後の報告では大正報告と呼称する。

「(イ)藤崎の石棺

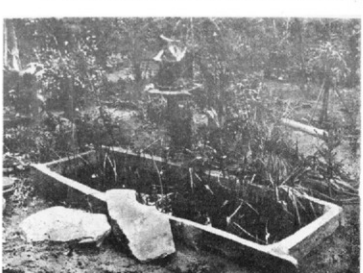
一、所在地　福岡市西新町大字鹿原字藤崎八七五番地川庄岩五郎氏宅地、北筑電車藤崎停留所の前

一、発　見　藤崎は第三紀の地層に属し上古入江と伝へらるる早良川の沿岸に位置し一帯の沿岸を袖ノ松原と称し白砂の松林なりしが五六十年前に伐採せられて人家相連るに至れり。発見地を距る十余間に庚申堂あり、王朝時代よりの遺跡と伝ふ。

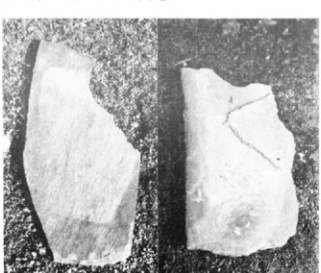
所有者は明治四十五年三月十九日宅地内にて土砂採取中地下五尺のヶ所に於て石棺を発見せり、石棺の長六尺三寸五分、幅一尺一寸、深一尺六寸七分、底石なく蓋は三四枚に分裂せるものを併べたる厚さ約三寸の切石なり。棺内には四肢を完備せる偉大の骸骨と、(頭部は東向)青銅の古鏡一ケ、直刀及刀身の一片とを見出せり。棺及その周囲の土砂は赤色を帯び、死体を朱詰となしたる形跡を認め得るも朱の凝結せるものはなかりしと云う。

鏡は直径八寸、縁の幅四分を有せる青銅の大鏡なり。直刀は長二尺一寸拍剣一名環頭太刀にて、刀身の上部には鞘の如きもの腐蝕して密着し、その剝落したる個所には布片を使用したる跡と認められる布目明瞭に露はれ居りしと云ふ。副葬品の全部は大正二年三月帝室博物館に納められる。

図は本石棺の写真にて目下庭前に運ばれ棺の底を塞ぎ水草を栽培し錦鯉を飼へり。」



Ph.1　(部一ノ石蓋ノ前)　棺　石　の　崎　藤



Ph.2　32次調査地内表採・出土玄武岩板石

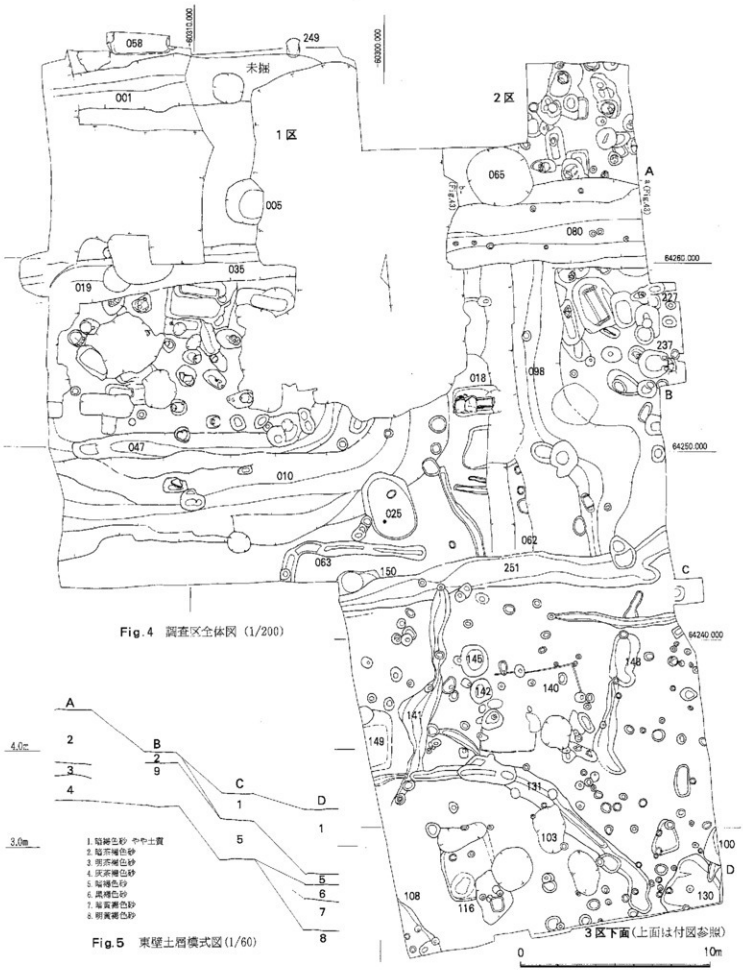


Fig.4 調査区全体図 (1/200)

Fig.5 東壁土層模式図(1/60)

Ph.2は玄武岩製の板石で、左は調査地点の敷地奥で地表から出た土管に被せてあり、右は表土中の出土である。左はPh.1中央に見られる石と形状が一致し同一のものと、右は片面にコンクリートが付着し、やはりPh.1の水槽にした石棺材ではないかと考えられる。今回の調査地点が明治45年の箱式石棺出土地であることの印の一つと言えよう。

Ⅳ. 調査の記録

1.調査の概要

調査地点は敷地の北側が砂丘の頂部を横断する国道に面し、バス停留所の前に位置する。調査前の字図では藤崎12-1、-2の大きく二つに分かれ、そのうち国道に面した12-1はガソリンスタンド(以下GS)、奥の12-2は民家が解かれ、竹の根が広がりビル化が進んだ地区にあって昔日を思わせるものがあった。周辺の調査から、甕棺、方形周溝墓の存在が予想されたが、GSのタンク等の攪乱で遺構の残りは表減的な状況が想定された。北側の西約2/3を1区、残りの西側を2区、奥を3区と仮称し、最初に1区、反転の後2、3区の順で平成13年10月1日から14年1月31まで調査を行った。調査面積は中央の攪乱をのぞいて1100㎡である。建物が建たない1区南端幅約5mと入り口部分17×6mは調査を行っていない。入り口部分西半は遺構の確認のみを行い、甕棺1基は取り上げた。

標高は現況で最も高い北端で4.45m、南側は次第に下がり3.4mで高低差がある。遺構面は黄褐色砂層で北端が標高3.4m、南端で2mを測る。3区ではFig.5の7層上面と黄褐色砂層の2面の調査を行った。1、2区でもいくつかの遺構は上面から検出を試みたが1面のみの調査である。この黄褐色砂は北側では細かい風成砂で、ややレベルが落ちた1、2区南側から3区はやや粗く水成砂と考えられる。

1、2区では近代以降の遺構とGSの基礎等により近世以前の遺構は攪乱を受け、特にGSのタンク等は攪乱が大きく深い。それでも甕棺43基、木棺墓・土壙墓16基、石棺墓1基、周溝墓3基、古墳時代の住居1軒、中世の溝1条、その他土坑を検出した。そのうち1号周溝墓の主体部が明治45年発見の箱式石棺墓と考えられる。3区上面(付図参照)では土坑基、溝条、ピットを検出し、近現代のものが多い。下面では3号竪溝の続き、古墳時代後期の住居跡4軒、中世の溝、土坑を確認した。以下遺構の種類ごとに報告するが、紙面の都合で簡略な記述になる。

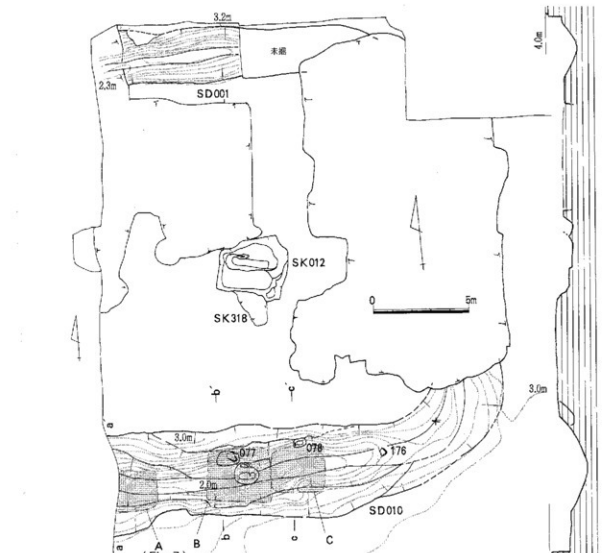
2.古墳時代の墳墓

古墳時代前期の周溝墓と考えられる遺構を3基検出した。いずれも調査区外に広がり、攪乱を受けて全容を確認できたものはない。また確実な主体部があるものは1号のみである。主たる調査は溝の確認になった。遺物は弥生時代のものが多く、少量の古式土師器と上層からは古代の遺物が出土する。編集の都合上、遺構の時期の遺物と考えられる古式土師器については遺構の報告の後に掲載する。

(1) 1号周溝墓(Fig.6)

1区の北端、南端で東西方向の溝SD001、010を検出した。2つの溝は東側がそれぞれ南、北側に曲がりGSのタンクで攪乱された部分でつながる一連のものと考えられる。西側は調査区外に延び、SC010の下端は北側に曲がり気味である。中央には明治時代のゴミ(?)穴SK318の下部に石棺墓の主体部と考えられるSK012を検出した。以上の遺構群は配置から方形周溝墓と考えられる。

本周溝墓は東西幅21m+α、南北幅25.5m、台状部で東西17m+α、南北17.3mを測る。周溝は北側のSD001を表上直下の標高3.5mで幅3.2mを確認し、底の標高2.3mで勾配は急である。東側半分は調査範囲外でプランのみ確認し未掘である。2層の暗褐色砂からは古式土師器が出土し、下層ほど色調が淡く3層以下では弥生土器のみが出土した(Fig.7)。6世紀代の住居跡SC058が北に隣接し、その



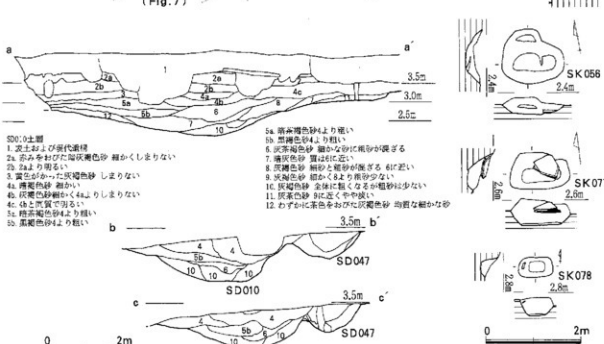


Fig.6　1号周溝墓(1/200、1/100、1/80)

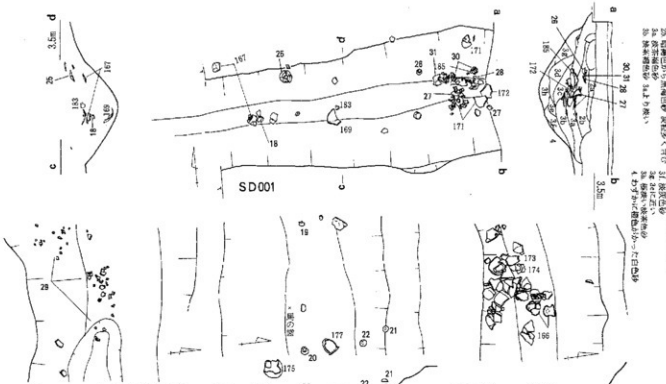
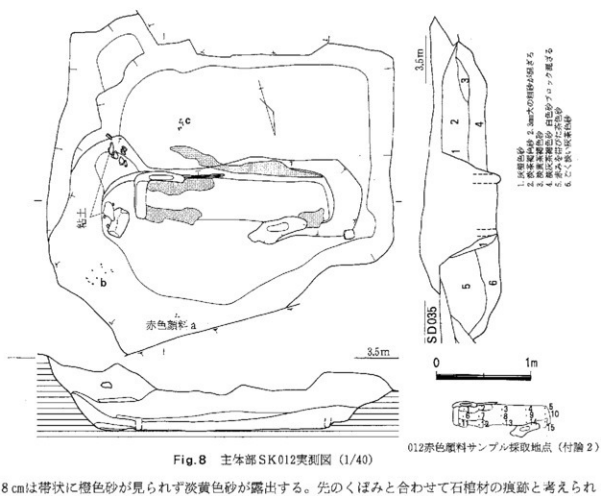


Fig.7　SD001、010出土遺物出土状況(1/80)

時期には埋没していたと考えられる。南側のSD010の上端は北側が標高3.3m、南側は2.4mで幅4mを測り、底は深いところで標高2mである。南北のレベル差は、この部分で黄色砂層面のレベル全体が下がることによる。またFig.6のa層からc層の黒褐色砂5層までは古代の遺物が入る。Fig.10に1から10を示した。須恵器と土製の鈴、錘である。この他に馬の歯が出土した(Fig.7)。3次調査の6号周溝墓の周溝でも黒褐色砂に古代の遺物が入る。また南側の上端西端部は南に広がって5層が溜まり、古代に掘削があった可能性もある。6層以下からは古式土師器等が出土し、底に近い7、10層からは弥生土器が多い。Fig.7-Cには金海式甕棺が投棄された様な状況があり、2個体173、174が復元できた。完形に近い小型甕等と共に周溝墓造営時の所産だろう。SD010内では土坑状のSK056、077、078を確認したが遺構か不確実。SD010はFig.6の等高線のように東側で底の標高が上がる。このあたりは削平が大きく溝の残りが悪い。またSD010の北岸に沿って幅140cmの溝047が巡り(Fig.4)、Fig.6の様にSD010が切る。本周溝墓に伴う可能性を否定はできないが弥生時代の墳墓に伴うと考えている。1号周溝の南北長は、3次調査で三角縁神獣鏡が出土した6号方形周溝墓を3m上まる。

埋葬主体部(Fig.8)台状部のほぼ中央に、近代に石棺の抜き跡と考えられる東西方位の堀方を検出した。近代の土坑SK318下部の覆土は表土が若干混じる橙色砂で、長方形の堀方を確認した。堀方の底直上まで近代の遺物が入る。大正報告の「周囲の土砂は赤色を帯び」を埋め戻したと考えられる。床面の長さ200cm、幅50cmで深さ70cmを測る。これはSK318を掘削した際に攪乱を受けた範囲で石棺の抜き跡の規模を表し、それ以上の攪乱を加えていないようである。この床面では東南隅に幅8cm、長さ50cm、深さ3cm、北西側に長さ45cm、幅15cm、深さ7cmの帯状のくぼみがあり、裏土混じりの橙色砂が入っていた。また、床の全体に橙色から赤色の砂が広がり、特に北半の脇10cm幅が濃く、中央部分は黄白色に近い。壁、斜面にも橙色の砂は広がるが、東西の短辺、南側には床と壁と間の幅7、



012赤色顔料サンプル採取地点（付論２）

Fig.8　主体部SK012実測図（1/40）

8cmは帯状に橙色砂が見られず淡黄色砂が露出する。先のくぼみと合わせて石棺材の痕跡と考えられる。棺の内側で長さ194cm、幅38cmを測る。また床までの深さは現地表から145cmほどである。これらの数値は大正報告「長六尺三寸五分、幅一尺一寸」「地下五尺の ケ所に於て」と一致する。主体部の堀方は、北側は中世の溝SD019(035)に切られ残存南北長360cm、東西370cmを測る。覆土は上部が茶褐色砂、下部が淡灰茶色砂でその面付近で北、東、南に赤色顔料の粒が少量散らばる(Fig.8)。北側では床から50cmほど浮いて３から20cm大の粘土塊が２カ所で出土した。堀方内の遺物は弥生前期の遺物が多く、北側の堀方には40～50cm長の珪化木が４つ、東側では花崗岩１つがあり弥生時代の墓に伴う可能性がある。近代の土坑SK318からは赤色顔料が付着した玄武岩の石棺材と考えられる破片が出土し、明治45年に近い時期に廃棄されたと考えられる14から17の陶磁器の他に瓦等が出土した。また橙色砂からは人骨１片、黄色粘土塊が出土した。

以上の方形周溝の配置と規模、近代に石棺を抜いた堀方から、この方形周溝墓が明治45年に三角縁波文帯盤龍鏡、素環頭大刀を出土した箱式石棺墓と考えられる。（赤色顔料については付論２参照）

副葬品(Fig.9) 今回の調査では主体部に伴う遺物は出土していないが、明治45年に出土した鏡等が現在、東京国立博物館に納められている。鏡については各種出版物、展示会等で取り上げられる機会が多いが、他の遺物も含めて簡単な図と共に紹介しておきたい。

三角縁複波文帯盤龍鏡（樋口隆康「三角縁神獣鏡総監」1992による）径24.6から24.7cmを測る。滋賀県八日市市雪野山古墳出土３号鏡と同型鏡で、同報告書(雪野山古墳発掘調査団「雪野山古墳の研究」1996)等に詳述されている。鏡面は全体に錆が覆い、内区に一部欠けた部分があるが遺存状態は良い。砂粒が付着する。赤色顔料は鏡背の縁部分に所々、鏡面には部分的に２カ所見られる。

素環頭大刀および人刀　大正報告では「直刀(素環頭大刀:編者注)及刀身の一片」とある。東京国立博物館に収蔵されていた鉄器は仮にAからEとした５点である。Aは環頭部で長方形に近い楕円形を呈し断面は径１cm強の弓形である。黄茶色の錆に覆われ、長軸6.3cm、短軸４cmの規模と推定される。

三角縁複波文帯盤龍鏡(1/2)

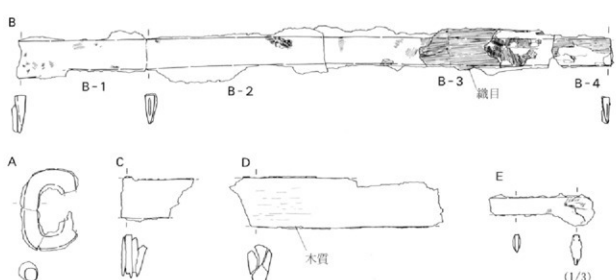


Fig.9　明治45年出土箱式石棺副葬遺物 (1/2.3)

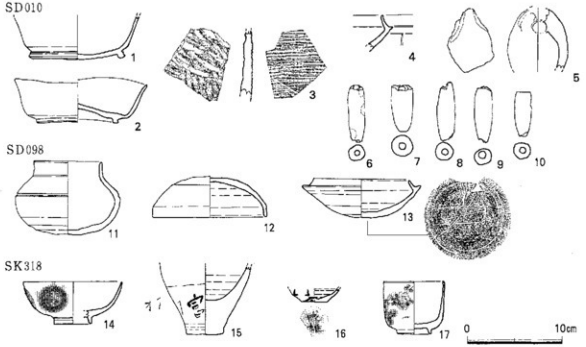


Fig. 10　SD010・098. SK318出土遺物実測図 (1/4)

茎部との接合部が欠損し3破片からなる。Bは大刀の身で、錆が著しい。B-1から-4の4つの破片が接合し、両端が欠け現存長47cmである。図示した表面は比較的錆が少なく、随所に織目が残る。特にB-3、4に於いて顕著で、重なり合う織目が明瞭に見られる。(織目については付論1参照)裏面は錆が著しく砂が一面に付着する。幅はB-4部分で2.1cm、B-2部分で2.25cmと若干の差があり-2が現状では厚手である。B-1の端部4cmほどは幅が広がり他の破片が付着している可能性がある。C、Dは共に3、4枚に割れ、黒色が強い破面の質感が似る。見た目で同一個体と考えられる。Dは幅3.9cm、厚さ1.8cmを測り、Bとは大きさに差がある。Dには木質が残り、Cには織目がわずかに観察される。大正報告では二尺一寸の環頭大刀の上部に鞘の如きものが密着し、布目が明瞭にあるいう旨の記載がある。その内容のまま当てはめると、長さからAとBで環頭大刀の記述に近くC、Dが「刀身の一片」ということになろう。しかし、B、C、Dが同一であったり、他の破片の存在可能性なども考えられ、鉄質やX線写真など詳細な分析を行って検討すべきであろう。Eは幅3cmと薄手で刃部を持つことから刀子と考えられる。基部は幅2.3cmと幅広だが錆のため形態が不明瞭で表面には織目が残り砂が付着する。

(2) 2号周溝墓(Fig.11)

2区で矩形に周出する溝SD098を検出した。その形態は前方後方墳を連想させ、出土した遺物を考えに入れ周溝墓とした。SD098は北をSD080、西をGSの攪乱で切られる。北半の南北直線部分は現存で幅2.3から2.4m、底の標高は多少の高低はあるが平坦で2.9から2.75m、深さは残りの良い箇所で80cmを測る。くびれ状の部分は幅4.25m、底は標高2.3mと深く、南端は狭まりSD251に切られる部分で底の標高2.55mとやや上がる。覆土は、上部が黒褐色から暗褐色砂で遺物は弥生中期の土器が多く、上部では6世紀代の須恵器11から13、くびれ状部分上層で古式土師器が出土している。またSD080の北岸はSD098の延長から東が北に段を成してふくらみ、東西方向の溝を想定すると北岸部の可能性がある。以上の前提に立てば、全長20m強で、北側の溝の幅を2.7m程すると北側の方形部の内側を南北10mほどに復元できる。その方形部のほぼ中央にあたる部分には、平面隅丸長方形で南北に長軸を持つSK215があり、位置から主体部の可能性が最も高い遺構である。南北長212cm、幅120cm、深さ35cmを測り、覆土はきめの細かな淡灰褐色砂で南端部には粘土混じりの黄褐色土が幅10cmほど見られた。

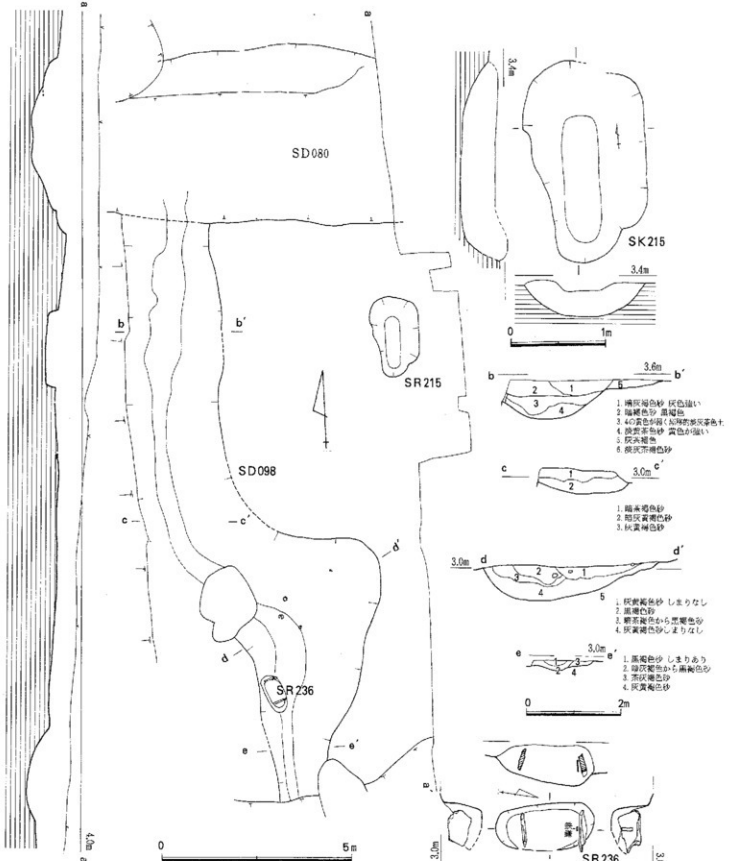


Fig.11　2号炭窯墓実測図 (1/100.80.40)

遺物は出土していない。また、周溝内で小口に板石を立てた土坑SK236を検出し、鉄鏃449(Fig.51)が出土した。

(3) 3号周溝墓(Fig.12)

SD063、SD141を一連の周溝と考え3号周溝墓とした。SD141は途中で鍵形に屈曲し2号周溝墓様の前方後方状または2つの方形周溝の重なりが復元できよう。SD063は幅80cm、深さ10cmから25cmを測り、SD141は幅100cmから30cm、鍵状部で180cm、深さ10から20cmで底は遺構面の傾斜と同様に下がる。覆土はいずれも黒褐色砂でSD063の西南端、SD141の鍵状部南で古式土師器が出土し、その他の部分で遺物は出土していない。主体部と考えれる遺構はない。

(4) 周溝墓出土古式土師器

(Fig.13～15、18～43)

以下の記述では、系統分類と編年については、久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」(『庄内式土器研究』XIX)による。18～31は1号周溝墓。18はA系小型直口壺。SD001下層。1/3残存。外面は、体部下半タテハケ、中位以上ハケ→ナデ→ミガキ、口縁部ヨコナデ・ミガキ。胎土はやや粗、石英・花崗岩粒(やや多)、雲母(微少)、角閃石(稀少)含む在地適有のもの。浅黄橙～浅黄色(適有な色調で、以下同系色は記述省略)。19はA系の器形、技法はB系のム型短頸壺。SD010最下層。1/2残存。胴部中位やや下に成形画期。胴部外面は粗いミガキ(下位タタキの、上位ハケメの痕跡)。内面は、左上ヨコハケ後(頸部下ハケメ残る)、下位ケズリ→ミガキ、上位ナデ消し。胎土はやや粗、砂礫構成は適有に近いが、雲母含まず、輝石(微少)を含む。20は山陰系小型直口壺。SD010。略完形。口縁部は薄くシャープな作り。体部外面タテハケ後、下位ナナメハケ→ナデ、上位ヨコハケ当統→肩部回転ヨコナデ。口縁部内外とも回転ヨコナデ(擦痕)。内面は、頸部ナデ(シボリ残る)、胴部ケズリ(丁寧)、底部は押捺頭著(ケズリ後明確)。にぶい黄橙色。胎土はやや密、石英(多)、長石(少)、角閃石・輝石・流紋岩?(微少)、雲母(稀少)を含み、搬入品か。21・22はいずれもSD010出土のA系小型鉢で完形。両者は法量がやや異なるが、胎土・色調・特徴が同一。外面は、下半ケズリ→ハケメ、上半ナデ→疎いミガキ。内面は板ナデ→ナデ、口縁部ヨコ板ナデ。胎土は密で精良、砂礫は少ないが西新町・藤崎で適有な構成で他に赤色土粒(微少)を含む。23はB系小型鉢。SD010。完形。外面はケズリ→ミガキ。内面は(ハケメ→ケ

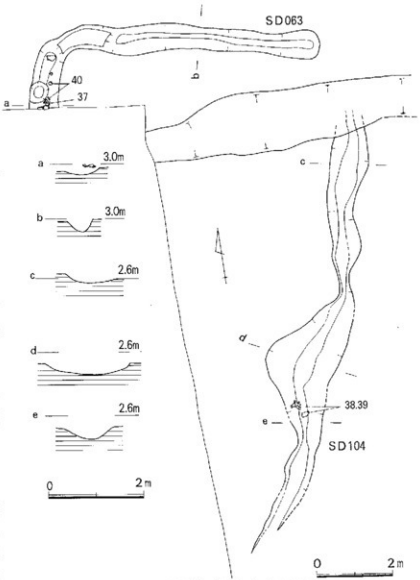


Fig.12 3号周溝墓実測図(1/100.80)

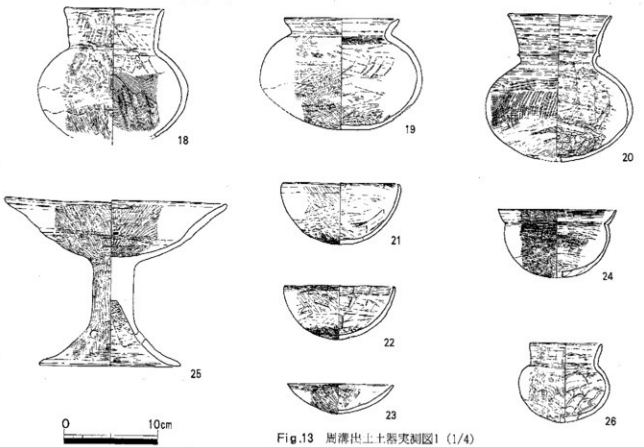


Fig.13　周溝出土土器実測図1（1/4）

ズリ→）ヨコナデ→ミガキ。明赤褐～にぶい橙色。胎土はやや密、角閃石（やや多）、石英・長石・輝石（少）、雲母（微少）を含む。24はC系の精製器種B群の小型丸底壺。口縁部が短く内湾するIa類。SD010下層＋SD063。1/4残存。外面は、体部タテハケ→下位ケズリ→細密ミガキ（下位不定・中位以上横方向）、口縁部タテハケ→ヨコナデ（横ミガキかかる）。内面は、体部ハケメ→ケズリ→ナデ→ミガキ、口縁部ヨコハケ→ヨコナデ。橙～明赤褐色。水簸精良胎土で石英・長石（少）、角閃石（微少）を含む。25はB系高杯で脚柱状部中実。SD001下層（＋上層）。完形。坏屈曲部の稜が甘い。外面は、脚部下半タテハケ→脚部全体タテミガキ、坏部タテハケ→下半ケズリ→タテミガキ。内面は、脚部下半ヨコハケ→擬痕ヨコナデ、脚部上半（シボリ→）ケズリ、坏部下半ケズリ・上半ヨコハケ→タテ・ナナメミガキ（→底部ヨコミガキ）。橙～明赤褐色。胎土は密、砂礫はやや少量、構成は通有に近いが雲母は含まず。18～25の各型式はⅡA期。26は布留式新相（ⅢB期）の粗製小型丸底壺。SD001上層。底部に打ち欠き。27～29は山陰系二重口縁壺でいずれも肩部外面に板木口による羽状文を施し、外面の胴部最大径より上は赤彩痕跡が認められる。27・28はSD001出土（上層・下層が接合）。27は、口縁部下端の突出にやや丸みがあり、口縁端部の面はやや凹む。外面は、胴部タテハケ→上位ヨコハケ→肩部ヨコナデ→羽状文・竹管文、頸部タテハケ→ヨコナデ。口縁部内外は回転ヨコナデ。内面は、胴部ケズリ（上位は平滑、中位以下やや粗雑）、頸部ナデ（シボリ残る）。橙～にぶい橙色（一部褐色）。胎土はやや密、砂礫やや少、石英（やや多）、長石（少）、角閃石（稀少）を含む。28は、外面はタテ・ナナメハケ→肩部回転ヨコハケ（→上下に沈線文）→肩部上位回転ヨコナデ→羽状文。内面ケズリは27と同様。27と同色。胎土はやや粗、石英・花崗岩（多）、長石（中量）、角閃石・輝石（稀少）を含む。29はSD010。破片がバラバラに出土し、図面は復元的。調整は27・28

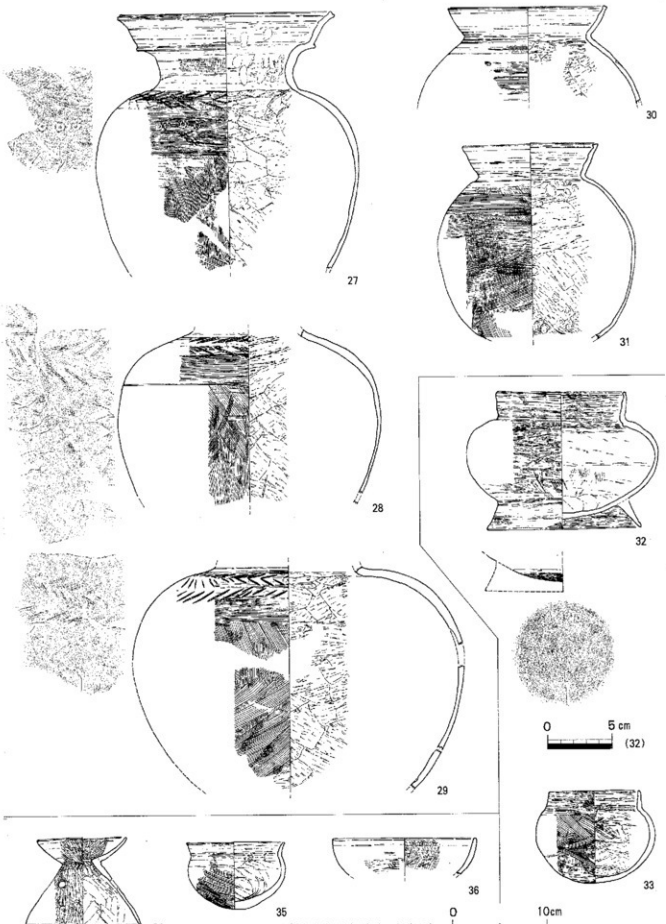


Fig.14 周溝出土土器実測図2 (1/4.3)

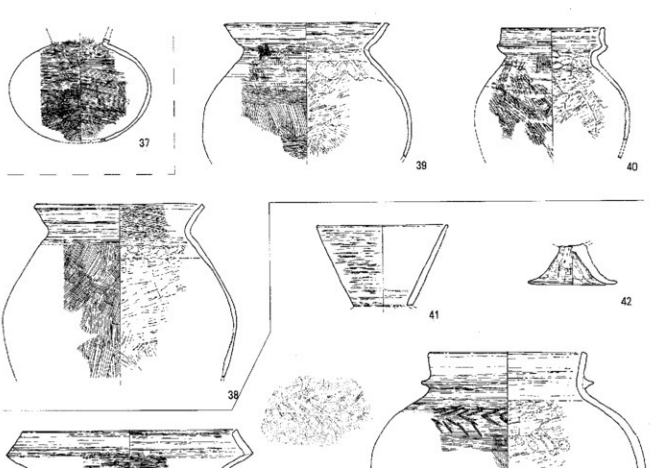


Fig.15 周溝出土土器実測図3 (1/4.2)

とほぼ同じ、3段羽状文。明黄褐～橙色。胎土はやや粗、砂礫構成は28に近いが、輝石含まず、雲母（稀少）を含む。30・31は布留系の甕D。30はSD001（上層＋最上層）。口縁部は内湾気味で、端部の面は水平に近いが僅かに外傾。外面は、肩部回転ヨコハケ、肩部～口縁部内外回転ヨコナデの甕Dの典型調整。肩部外面に豆粒文。内面ケズリは平滑。にぶい黄橙色。胎土は密、砂礫の量と構成は通有のもの。31はSD001上層。略完形（底部欠損）。口縁部は直立気味。口縁端部は内側に肥厚、上方のやや凹む面は内傾。外面は、胴部タテハケ→ナナメハケ→上半ヨコハケ→肩部以上は甕Dの回転的諸調整。口縁部は内外回転ヨコナデ（内面ヨコハケ後）。胴部内面ケズリ（上半は平滑、下半は粗雑）→下部押捺（押出丸底技法）、甕部下ナデ（シボリ残る）。赤橙色（外面）～やや暗い灰褐色（内面）。胎土はやや粗、粗砂礫多い。石英（多）、花崗岩粒・長石（少）、角閃石・雲母（微量）を含む。30・31の様相は西新町5次SC01に近く（第375集）、湯納D5・D11溝と同じⅢA期新相。32・33は2号周溝墓（SD098）。32は台付短頸直口丸底壺。ほぼ完形。直立口縁部や偏球形体部、脚台部など韓半島の纏型土器の器形影響か（文様が無く法量が小さいのが異なる）。西新町4次SD44に類例（第203集Fig.54－28）。精製器種B群技法で製作（非常に細密なミガキ）。外面は、底面ヨコナデ→

回転ないし螺旋状ミガキ、脚部ヨコハケ→ヨコナデ、体部タテハケ→下位ヨコナデ・中位以上ヨコミガキ・上位～口縁部ミガキ状ヨコナデ。内面は、脚部ミガキ状ヨコナデ、体部ハケメ（頸部に残る）→ケズリ→ナデ、口縁部ハケメ→ヨコナデ。明赤褐色。水漉精良胎土で、石英（少）、長石・花崗岩粒（微量）、角閃石・雲母（稀少）を含む。33はA系小型短頸丸底壺。外面は、底部ケズリ→体部ハケメ→底部ナデ・口縁部ヨコナデ。内面は体部ケズリ→ナデ。にぶい橙～橙色。SD098には図化できないが内面ケズリの壺胴部下半片がある。34～40は3号周溝墓（34～37、40はSD063、38～39はSD141）。34は東海系？の小型器台。受部底面は欠損だが打欠きの可能性。脚部に3穿孔。外面は、脚部タテミガキ（器面凹凸はタタキ痕跡？）、受部はケズリ→タテミガキ。内面は、脚部ナデ（ハケ痕跡、上部シボリ）、受部タテ・ナナメミガキ。（にぶい）赤褐色～灰褐色（内面）。胎土はやや密、角閃石・輝石（やや多）、石英・長石・黒色（褐色）岩石粒（少）を含み、違和感があり搬入品か。35はA系で小型丸底壺Ⅰaまたは Ⅰ0類（口縁部短小で内湾しない）の模倣。明赤褐色。胎土はやや密、砂礫は少量で、構成は通有のものに近い。36はA系鉢小片。内外面ともにやや粗いミガキ仕上げ。37は精製器種B群長頸壺の体部。底部に焼成後小穿孔。外面は、底部ケズリ→ミガキ、体部はタテハケ→タテミガキ→下半ナナメミガキ・上半回転ヨコミガキ（ミガキ細密）、頸部タテハケ→ヨコナデ→ミガキ。内面のハケメは条痕細密。水漉精良胎土。砂礫は微量、構成は24と類似。橙色で外表面は明赤褐色。38は在来系壷Aの壷D影響変容品。内面ケズリ、頸部～口縁部外面を回転ヨコナデ（内面ハケメ）。肩部ヨコハケを欠如。胴部外面ナナメハケ→タテハケ。明赤褐～橙色。胎土はやや粗、砂礫構成は31に近く、赤色土粒（少）を含む。39は壷D。口縁部は内湾、端部の面はほぼ水平。頸部外面に接合痕残る。調整は壷Dの典型的なものだが、頸部外面に細いハケが最後に付く。内面のケズリは平滑。口縁部内面ヨコナデは擦痕強い。浅黄橙～橙色。40は山陰系二重口縁壺。口縁部外面は工具ヨコナデ条痕。外面は、胴部タテ・ナナメハケ（粗い条痕）→肩部ヨコナデ（断続板ナデ）。内面は、胴部ケズリ（粗雑）、頸部ナデ（シボリ残る）、口縁部ヨコナデ。橙～明赤褐色。胎土はやや粗、石英・花崗岩の粗砂優多い。41以下はその他の遺構出土だが、本来は周構墓に伴う。41は精製器種B群長頸壺。D・E－7・8区。外面細密ヨコガキ水漉精良胎土だが、24・37より粗い感があり、器壁ややや厚い。橙色。ⅠB～ⅡC期。42は脚付小型丸底鉢の脚部。SK100。鉢部との接合は付加法。外面は粗いタテケズリでミガキ省略、下位のみナデ。本来外面は赤彩か。水漉精良胎土。43はSD251。短頸直立口縁部の基部に突帯を付加し、二重口縁状とする。技法は山陰系調整で西新町遺跡に多い器形。肩部外面に刺状文。内面ケズリは平滑。丁寧な調整でⅡC～ⅢA期古相。橙～明黄褐色。44はA系複合口縁壺口縁部。SK074。外面扇曲部に米粒状刻目。ⅠA～ⅡA期。45は壷D口縁部小片。SD110。端部の面に僅かに拡張。器壁が一定でやや薄く、ⅡA～ⅡB期の福岡平野（比恵または博多か）産。

3．弥生時代の墳墓

甕棺墓43基、木棺・土壙墓19基、石棺墓1基を検出した。その分布は遺構面とした黄色砂層のレベルが下がり始める調査区北端から20m付近までに収まり、それより南には弥生時代の遺物もほとんど分布しない。しかし分布域はGS基礎の攪乱が大きく、また近現代の井戸等の遺構があり破壊されたものが多いと考えられ、実際にそれらの堀方から甕棺、副葬壺等の破片が出土する。墓壙は金海式までのものは淡灰色の埋土で比較的容易に検出できるが、中期のものはわかりにくい。紙面の都合で全ての遺構、遺物について詳述できないが、墓域のあり方についてふれた後、各墳墓形態の遺構番号毎に簡単に触れる。その跡、後世の遺構から出土した遺物についてふれたい。

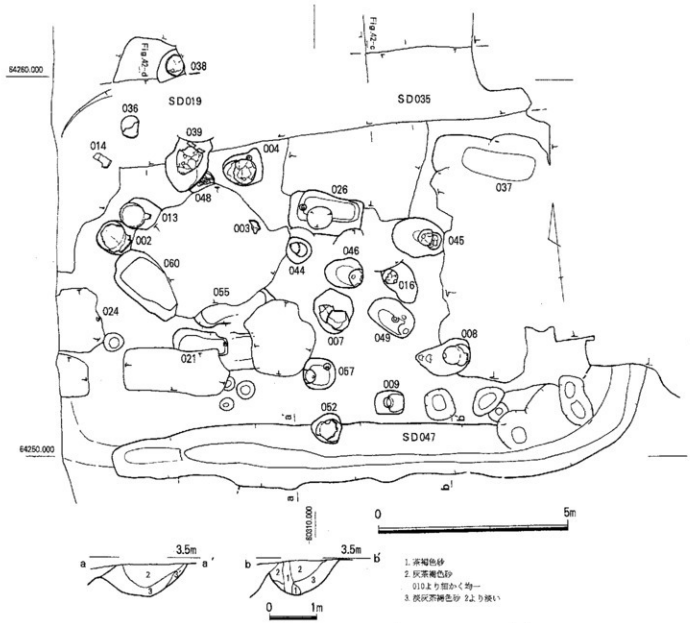


Fig.16 1区弥生時代墳墓配置図 (1/100.80)

(1)墓域

分布は攪乱により1区と2区に分かれ、甕棺の時期、木棺・土壙墓のあり方にも差がある。

1区では甕棺17基、木棺もしくは土壙墓5基を検出した。石棺墓1基は甕棺等の墓域からはずれる。Fig.16の北、東側はSG で攪乱を受け、南はSD010で攪乱される。ただし、南側は遺構面が下がり、もともと分布は伸びないと考えられる。甕棺は中期の大型棺1基の他は金海式以前である。大型棺3基、中型棺5基、小型棺8基と小型が多い。主軸方向は甕棺、木棺等ともにややぶれるか東西方向がほとんどである。以上のように1区は、坂付Ⅱb式から金海式までの甕棺、木棺墓等が東西方向の配列をなして集まる。そして、分布の南側にはそれを囲むような東西方向の溝SD047がある。SD047は最大幅140cm、深さ75cmを測り、東端は急な弧を描いて北へ直に曲がる。西端は浅くなって立ち上がり、溝の底と考えられる痕跡が調査区際で北へ直に曲がる。覆土は淡茶褐色から淡灰茶褐色砂で、S010に切られる。遺物は少なく小片のみで、甕棺の時期に収まる。Fig.17の壺46、47、甕棺48が出土した。

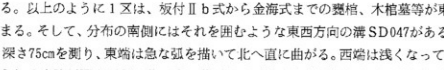


Fig.17 SD047出土遺物実測図 (1/3)

この溝は方形周溝墓の内側の溝の可能性もあるが、埋土、形態、深さが異なる。上記のように甕棺、木棺が規則性を持って時期的にも集まる事を考慮に入れると弥生時代の墳墓を巡るとも考えられ、区画墓、墳丘墓の可能性もあろう。北側については当初SD019、035を対応すると考えたが、019、035は2区のSD080の続きで中世のものであることが判明した。しかし、西端の調査区際で溝自体は調査区外に延びるが、底に深さ6から15cmほどの南へ急に自がるプランを検出し(Ph.75)、中世の溝SD019がSD047に対応する溝と丁度重なっている可能性も残る。また、ここより北であればSE005付近に確認できるはずでSD001まで広がることは考えにくい。以上、仮定を重ねた上ではあるが南北8m、東西14mほどの区画が浮かんでくる。ただし、ST038はそのすぐ北の範囲外、ST52はSD047に切られる。

2区では甕棺23基、木棺・土壙墓は10基を数える。SD080、GSの攪乱で失われたものも多いだろう。甕棺は中期が大型1、中型5基、小型12基、金海以前が大型4基、小型1基と1区に比べ中期それも小型棺が多い。方位は南北方向が多い。木棺墓等で時期を決める遺物を持つものはないが、甕棺と重なる場合はすべて切られる。狭い範囲の調査で不確定な部分があるが、木棺墓と金海までの甕棺は両者で列状をなすように見ることもできる。

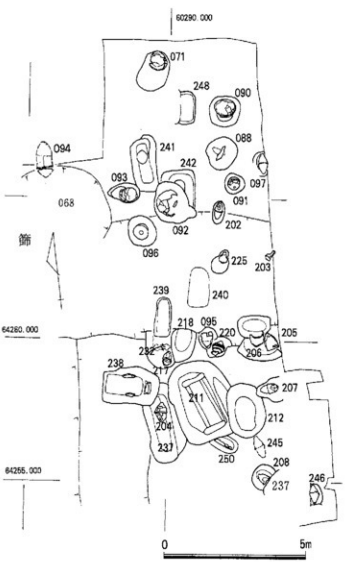


Fig.18 2I×弥生時代墳墓配置図 (1/100)

(2) 甕棺墓(Fig.19~22)

砂地であるため棺自体の残りは良く、調製も明瞭なものがほとんどである。前期の壺棺の多くは研磨調製を底部付近は縦で次第に斜めから胴部最大径から上では横方向に施す。その下に刷毛目が見られるものも多い。中期の小型の甕は縦方向の刷毛目が明瞭に残る。ST004(伯玄式)、013、096(以上金海)207(須玖小型)からは比較的残りの良い人骨が出土した。底付近の覆土は全ていにかけ、歯や骨片が出土したものがある。以下表、図に記載できなかった事を中心にふれておく。

ST057までが1区である。ST002はST013と近接するが切り合いは不明。形態では002が古い。歪み大きく49は復元的に作図した。ST003はGSの攪乱の壁にわずかに残っていた。原位置からずれている。ST004は伯玄式で副葬小壺を持つ。小壺119はわずかに赤色の彩文が見られる。下甕には人骨が良好に残る。ST007は墓壙の底のくぼみに赤色砂が溜まる。大型壺片146が出土。ST008は上下棺とも完形で墓壙は段を成す。ST009は単棺で器壁が厚い。ST013は金海式で人骨が比較的良好な状態で出土した。ST014は攪乱により残りわずかで原位置かやや疑問。86の中型の壺の復元は径、

表1．弥生時代の墳墓一覧表

遺構番号	区	種類	方位	遺構Fig	甕棺図番号	遺物Fig.-番号	時期	形態	棺種類	棺内出土物	備考
2	1区	甕棺	N-145°-E	19	49		大型伯玄	単棺？	甕		
3	1区	甕棺	N-57°-E	20	91		小型前期	？	小型壺		原位置？
4	1区	甕棺	N-91°-E	19	50.51	33-119	大型伯玄	覆口	壺甕	骨良好歯、小壺	上下とも頸部打ち欠き
7	1区	甕棺	N-56°-W	19	69.70	34-146	中型金海	覆口	甕甕	歯と微細骨片少量	下口縁打ち欠き
8	1区	甕棺	N-89°-W	19	71.72		中型金海	覆口	甕壺	歯	
9	1区	甕棺	N-88°-W	20	75		中型前期	単棺	壺		
13	1区	甕棺	N-103°-E	19	52		大型金海	単棺	甕棺	歯、骨片大きめ	人骨残り良好
14	1区	甕棺	N-128°-W	20	86		中型前期？	？	？	骨片少量	一部のみ
16	1区	甕棺	N-140°-E	19	76.77		小型前期	覆口	鉢壺		下頸部打ち欠き
24	1区	甕棺	N-96°-E	20	100		前期中型	？	甕		底のみ　原位置？
36	1区	甕棺	N-175°-W	20	53		金海？	？	甕？		SD019の底に残存？
38	1区	甕棺	N-73°-E	20	73、74	33-124,34-147～149	中型前期	覆口？	甕壺	骨小片、勾玉	口縁打ち欠き？
39	1区	甕棺	N-154°-W	19	56.57.58	34-150	大型立岩	接口	甕甕	歯片少量	
44	1区	甕棺	N-70°-W	20	78.79	34-151	小型前期	覆口	鉢壺		下頸部打ち欠き
45	1区	甕棺	N-59°-W	19	80.81	34-152	小型前期	呑口	鉢壺	歯と骨片	上頸部打ち欠き
46	1区	甕棺	N-74°-W	19	87.88		中型前期	覆口	鉢壺	歯と骨片	下頸部打ち欠き
48	1区	甕棺	N-117°-W	20	82.83		中型前期	覆口	鉢壺	歯小片、骨片	下頸部打ち欠き
52	1区	甕棺	N-79°-W	20	59	34-153	中型金海	単棺	甕		口縁打ち欠き付論2
57	1区	甕棺	N-81°-W	20	84.85	33-120	小型前期	覆口？	鉢壺	小壺	
71	2区	甕棺	N-161°-W	20	54.55	33-125～140	金海	覆口？	甕甕	歯小片、骨片、管玉	下口縁打ち欠き？
88	2区	甕棺？	N-127°-E	21	62		中期？		甕？		胴部が一部のみ
90	2区	甕棺	N-8°-W	20	63.64		金海	覆口	鉢壺	歯小片、骨片	
91	2区	甕棺	N-177°-W	20	89.90		小型前期	覆口	鉢壺	歯小片	下頸部打ち欠き
92	2区	甕棺	N-64°-E	21	65		金海	単棺	甕	歯、骨片、骨片(R1)	倒置
93	2区	甕棺	N-103°-E	20	92.93		中型中期	接口	甕甕	歯、骨片大	赤色顔料
94	2区	甕棺		Ph.50	60.61		須玖	接口	鉢甕		上口縁打ち欠き
95	2区	甕棺	N-6°-E	20	94		中型中期	単棺？	甕		
96	2区	甕棺	N-175°-E	21	66		金海	単棺	甕	骨良好	倒置
97	2区	甕棺	N-169°-W	20	103.104		小型中期	接口	甕甕		
202	2区	甕棺	N-20°-E	21	101		小型中期	単棺？	甕	骨片	
203	2区	甕棺	N-142°-W	21	102		小型中期	単棺？	甕		墓壙不明　SD080底
204	2区	甕棺	N-170°-E	21	105.106	34-156～157	中型中期	接口	甕甕		墓壙不明
205	2区	甕棺	N-162°-E	21	95		中型中期	単棺	甕		
206	2区	甕棺	N-176°-W	21	68		中型中期	単棺？	甕		倒置気味
207	2区	甕棺	N-82°-E	21	107.108		小型中期	接口	甕甕	成人頭骨	
208	2区	甕棺	N-53°-W	21	109.110		中型中期	単棺？	甕	歯	
217	2区	甕棺	N-160°-W	21	111.112		小型中期	接口	甕甕		
220	2区	甕棺	N-22°-E	21	96.97		小型中期	覆口	壺壺		
225	2区	甕棺	N-10°-E	21	113.114		小型中期	接口	甕甕	歯等	
232	2区	甕棺	N-84°-W	Ph.56	98.99		小型中期	接口	壺壺		
245	2区	甕棺		Ph.57	115.116		小型中期	接口	甕甕	歯、骨片	
246	2区	甕棺	N-180°-W	21	117.118		小型中期	接口	甕甕		
249	2区	甕棺	N-1°-W	22	67	33-122	大型金海	単棺		小壺	
18	1区	石棺墓	N-90°-E	25			弥生後期？			骨片、骨（R3）	玄武岩板石
21	1区	土壙墓	N-90°-E	23		33-123	前末中初			小壺	
26	1区	木棺墓	N-84°-W	23		33-121	前末中初			骨痕跡、小壺	床・壁に赤色顔料付論2
37	1区	木棺墓	N-74°-W	23			前末中初？				
55	1区	土壙墓	N-76°-E	23		34-154	前末中初？				付論2
60	1区	土壙墓？	N-47°-W	23		34-155	前末中初？				付論2
211	2区	木棺墓	N-22°-W	24		34-159～161	前末中初？				組み合わせ式木棺痕跡
212	2区	土壙墓？	N-16°-W	24			前期？				SR211に切られる
218	2区	土壙墓？	N-15°-W	24		34-158	前期？			骨の痕跡	SD080に切られる
237	2区	木棺墓	N-10°-W	24			前期？				SR211、238に切られる
238	2区	木棺墓？	N-78°-W	24			前期？				角石配置
239	2区	木棺墓	N-37°-W	25			前期？				
240	2区	土壙墓？	N-6°-W	24			前期？				SD080の底に床の痕跡
241	2区	土壙墓？	N-1°-W	24			前期？				
242	2区	木棺墓	N-7°-E	25			前期？				
244	2区	土壙墓？	N-174°-W	25			？			頭骨	
248	2区	土壙墓？	N-2°-W	24			前期？				
250	2区	石小口	N-65°-W	25							

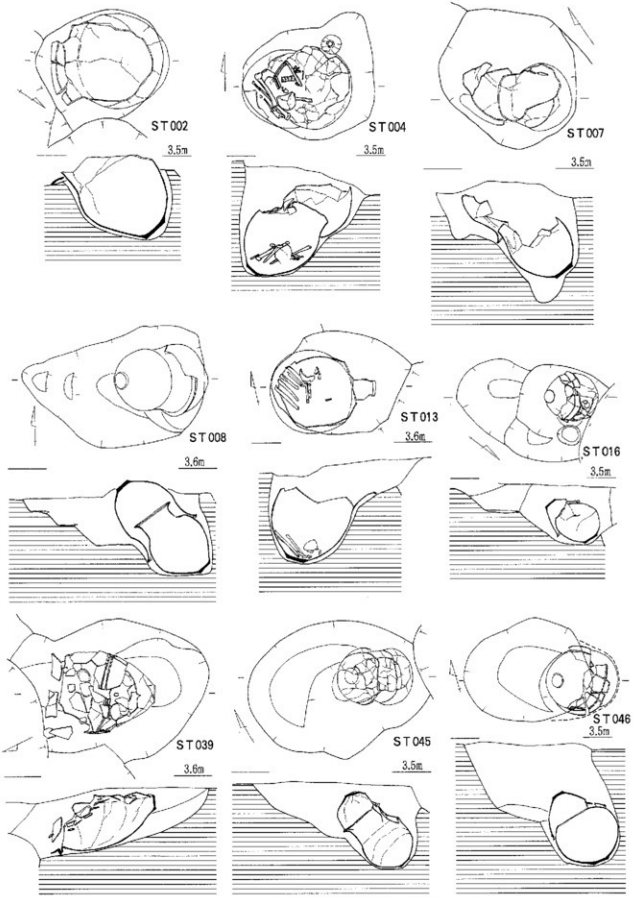


Fig.19 竪穴墓実測図1（1/30）

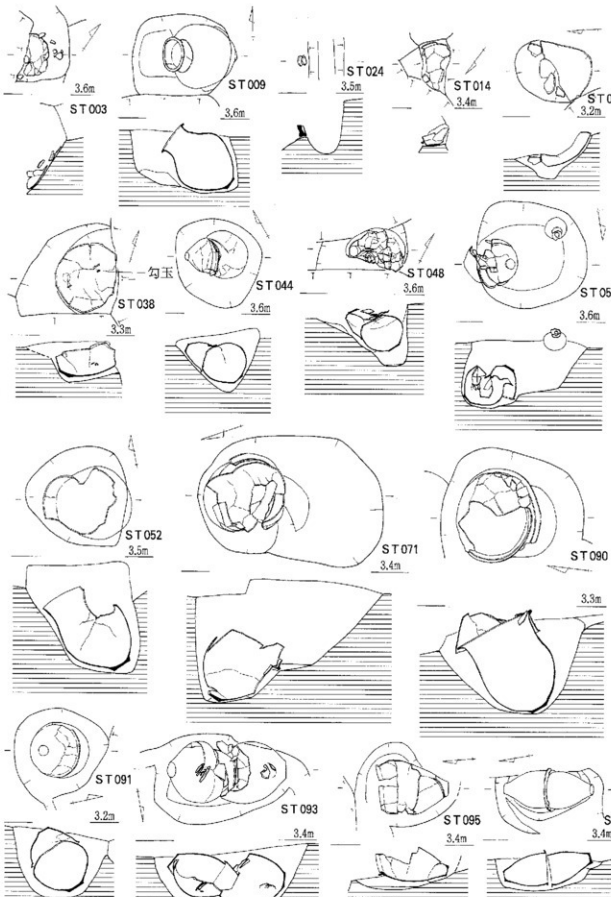


Fig.20 墓槙墓実測図2 (1/30)　0　1m

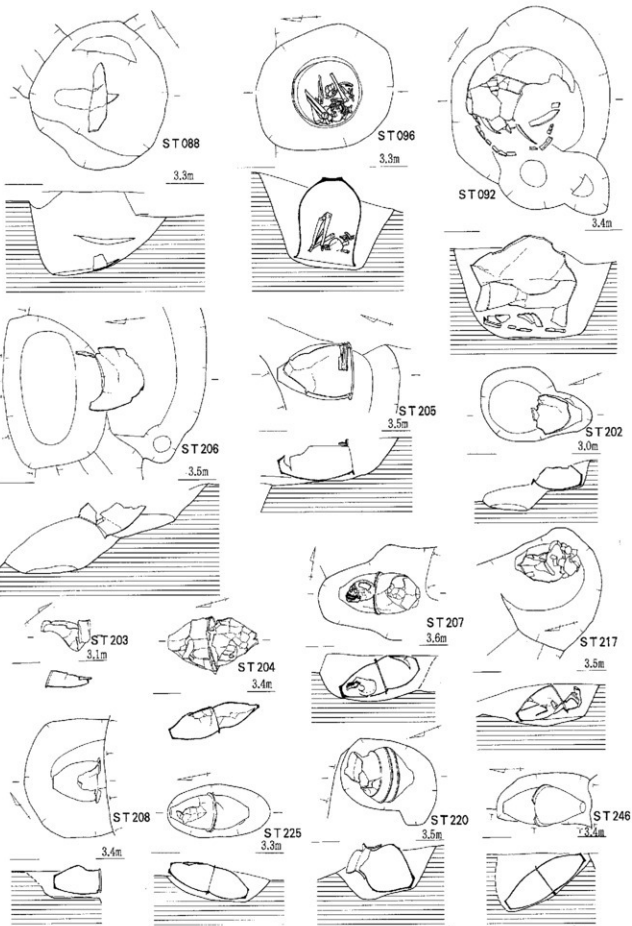


Fig.21 竪穴墓実測図3 (1/30)

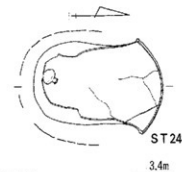


Fig.22 甕棺墓実測図4 (1/30)

傾きが不確実。ST016は下甕の壺の頸部を打ち欠く。ST036はSD035の底に胴部のみ残る。原位置か疑問。53は大形の竈になり1/6からの復元で傾き、径は不確実。ST038はSD035の北岸にあり、攪乱で上甕を切られる。翡翠の勾玉124が出土し3.86gを測る。遺存が悪い骨片が数点残る。73は棺内の小破片を下甕に合わせて復元した。上甕か。74上部は同一個体だが接合しない。覆土から壺片147から149が出土した。ST039は1区唯一の中期で立岩式。下甕がSD035に切られる。下甕の口縁57は原位置に残る。58の底部は上甕中の出土で別の個体か。壺底部150が出土した。ST044は墓坑の底のくぼみに茶褐色砂が溜まる。板付Ⅱ式の甕151が出土した。ST045、046は墓坑から検出できた。ST045から金海式の口縁152が出土。ST048は堀方の底がピット状を呈す。ST052は単棺でSD047に切られる。焼成がやや悪く器面の残りが珍しく悪い。壺口縁片153が出土した。ST057は堀方の上部に小壺120を副葬する。120には口縁部から肩部まで彩文があり、焼成後に穿孔を施す。以下は2区出土である。ST071は金海式甕棺で下甕は口縁を打ち欠き、焼きが悪く胴部黒斑部と底部付近はすでに砕けて管玉が棺外に出ていた。底部は復元不能。上甕は口縁部のみで胴部以下の破片はなく削平を受けたにしては残り方が不自然である。125から140は碧玉製の管玉で長さ8から9㎜、径3.5㎜程で重量1.1から1.6gである。他に破片が10点ある。ST088土壙の底から甕棺の胴部の一部が出土した。甕棺とは言えないが墓の可能性があると考え取り上げた。ST090は大型の鉢63を上甕にし1/3を欠く。ST091は小型の壺と鉢。ST092は倒置棺で土圧でつぶれる。骨片は脆く残りが悪い。65は大形で胴部が屈曲気味に曲がり外反する頸部に刻目突帯が巡る少ないタイプである。胴部下部には叩き状の痕跡が残る。底部は脆く細かく砕け接合不能。ST093上下ともきれいに赤色顔料を塗った中期の甕で上甕は割れた一部を横向きに敷いていた。上下とも口縁部がすぼみ丸みを持つタイプである。骨片が数個が出土。ST094は須玖式大型甕と鉢で鉢の口縁を打ち欠く。鉢を南にし、ほぼ水平に据える。SE068に切られる。ST095は中期末から後期初頭とされる甕である。SD080に切られ上甕があった可能性がある。ST096は金海式の倒置棺で成人骨が比較的良く残る。66の頸部のプロポーションは直線的である。ST097は調査区東壁から掘り出した。ST202はSD080に切られ単棺かどうかは不確定。北側にピット状の掘り込みがあるが関連は不明。ST203はSD080の底で検出した。上甕が切られている可能性がある。板石がのる。ST204は堀方が判らなかった。壺、甕片156、157が出土したが木棺墓SR237を切り、その遺物か。ST205は中期の中型棺で器面に煤が付着する。ST206はSD080に切られ1/2を欠く。斜めに倒置ぎみで下に掘り込みがあり、そのまま遺体に被せたか、木製の棺があったのかだろうか。ST207は小型棺から成人頭骨が出土した。ST208はSK237に切られ、対になると考えられる棺がSK237から出土し、下甕として110に示した。ST220はSD080に上甕が切られる。下甕は口縁打ち欠く。ST225は上甕に穿孔がある。ST232は遺構図を紛失した。赤色顔料が鮮やかな壺の合わせ甕がほぼ水平に主軸を東西方向にして出土した。ST217の下、SR239の上に位置する。ST245は遺構図を紛失した。合わせ甕でほぼ水平に据え、主軸は北北西に向く。ST246は拡張区で検出。ST248は調査区北の拡張区で確認し、これのみ掘削した。SD001に切られる。小壺122が棺内から出土したが、そのレベルまで最近の土が入り、棺外から落ち込んだと考えられる。墓坑を確認できていない。122は胴部上半まで所々に彩文が残る。

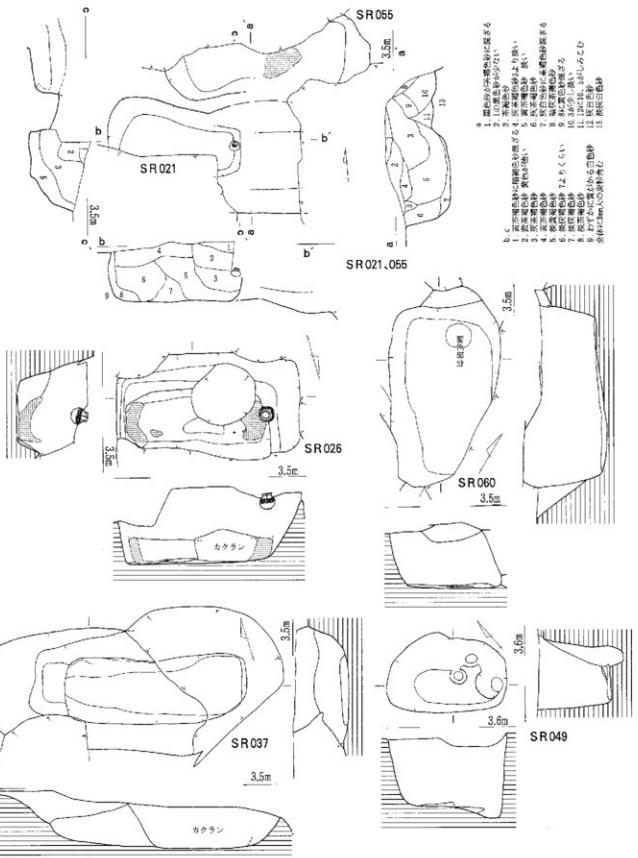


Fig. 23 木棺・土壙墓実測図 1 (1/40)

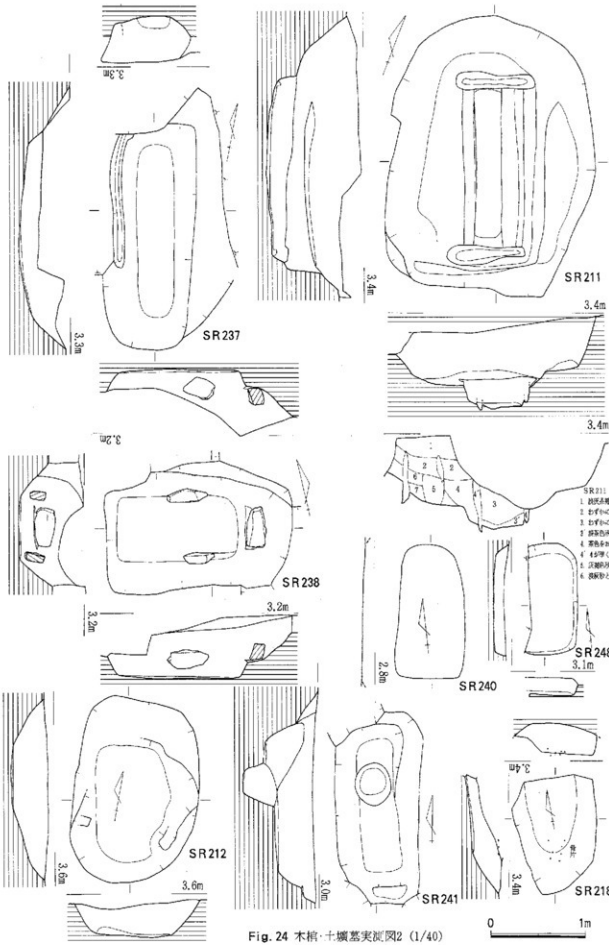


Fig. 24 木棺・土壙墓実測図2 (1/40)

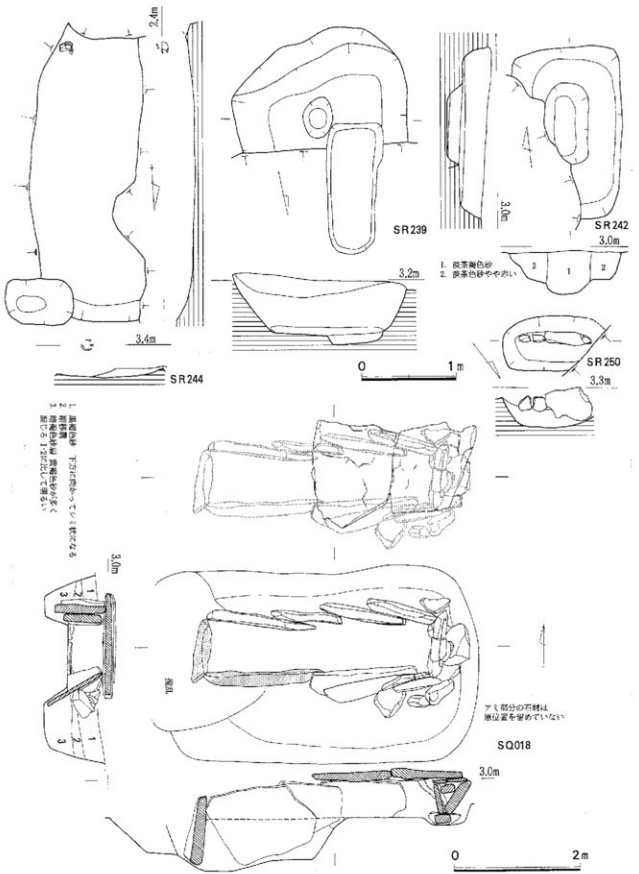


Fig. 25 木棺・土壙・石棺墓実測図3 (1/40)

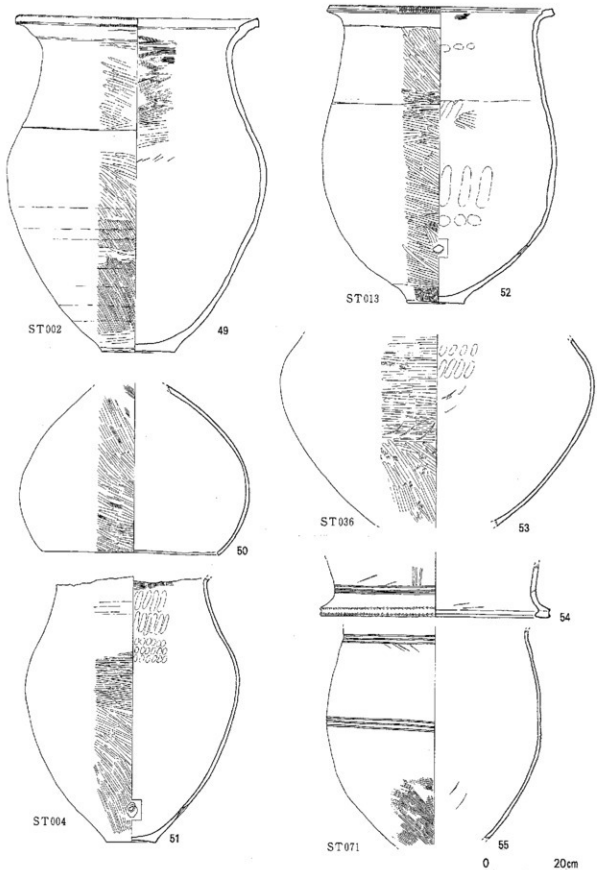


Fig. 26 出土甕棺実測図1 (1/10)

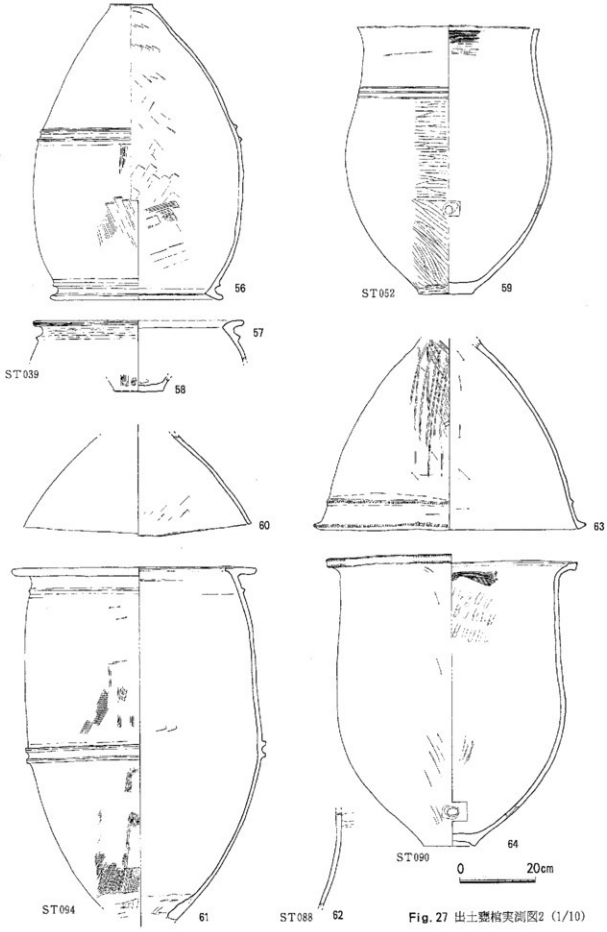


Fig. 27 出土甕棺実測図2 (1/10)

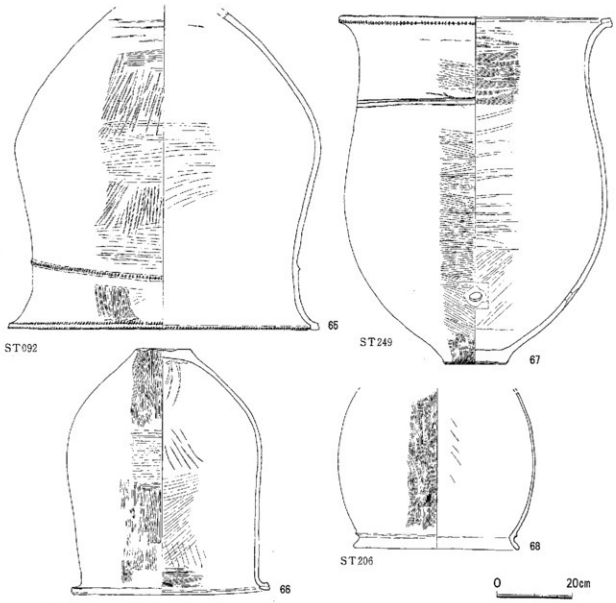


Fig. 28 出土甕棺実測図3 (1/10)

(3) 木棺墓・土壙墓(Fig.23～25)

木棺墓・土壙墓は切り合いがあるものは全て甕棺墓に切られ、SR244以外は金海式以前のものと考えられる。1区には副葬小壺を持つものがあるが、2区にはない。失われた可能性もあろう。2区では残りが悪くSD080より北は墓として良いのか迷うものもあるが、主軸方向が南北で共通し妥当と考えた。覆土は淡灰褐色砂、淡茶色砂で遺物はないものがほとんどで、あっても少ない。

SR021は小壺123が出土した。東側にも長方形の堀方があり、切り合いか一体のものか判断できなかった。SR026はSK012、ピット状の攪乱に切られる。堀方の内側に段を持ち、その内側の両小口付近が赤みをおび赤色顔料と考えられ、木棺の存在が予想される。残りが悪い小骨片が数点出土した。茶壙上部には副葬小壺121を持つ。SR037は東、南側を攪乱されるが底の痕跡で床面はほぼ復元できる。木棺墓の可能性がある。SR049は甕棺の墓壙と埋土、規模が似ているが遺物は出土しなかった。

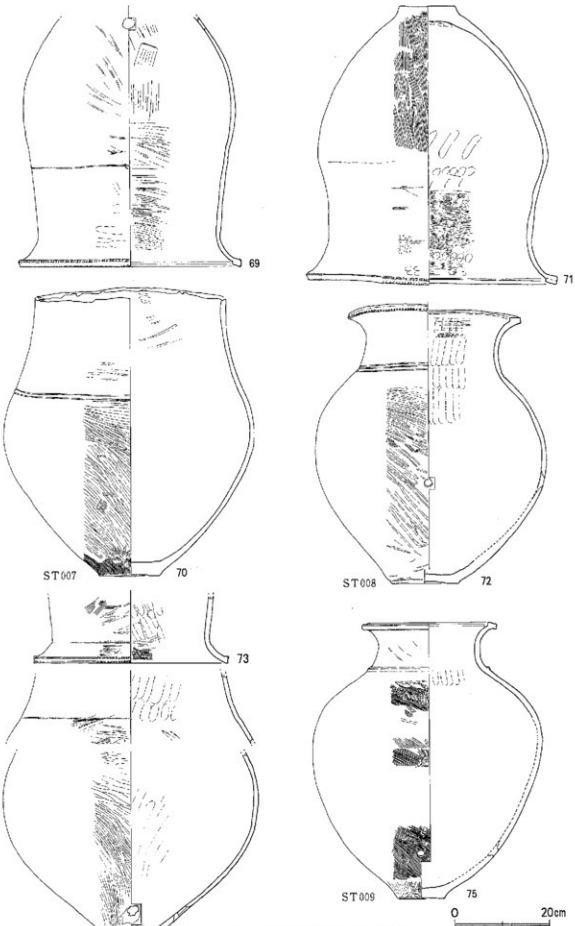


Fig. 29 出土甕棺実測図4 (1/8)

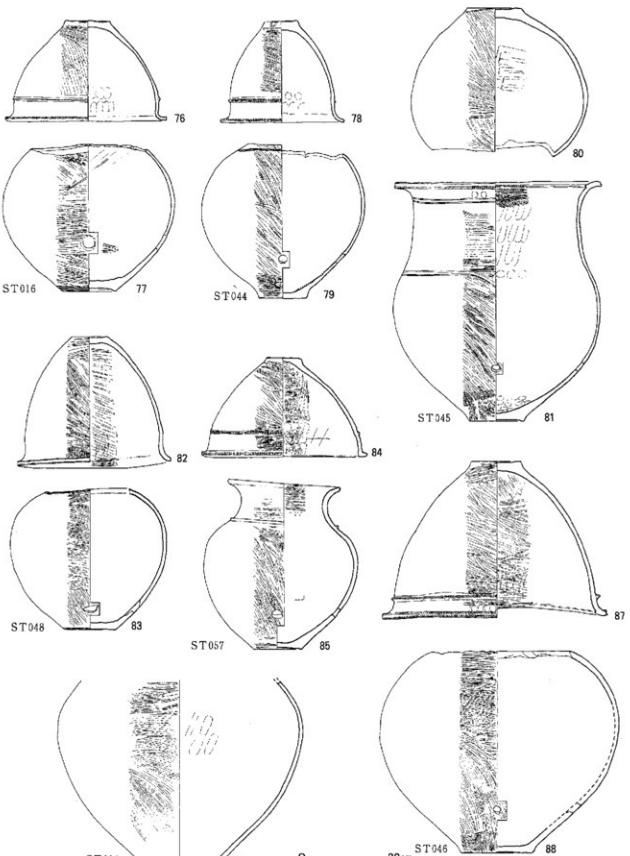


Fig. 30 出土遺構実測図5 (1/8)

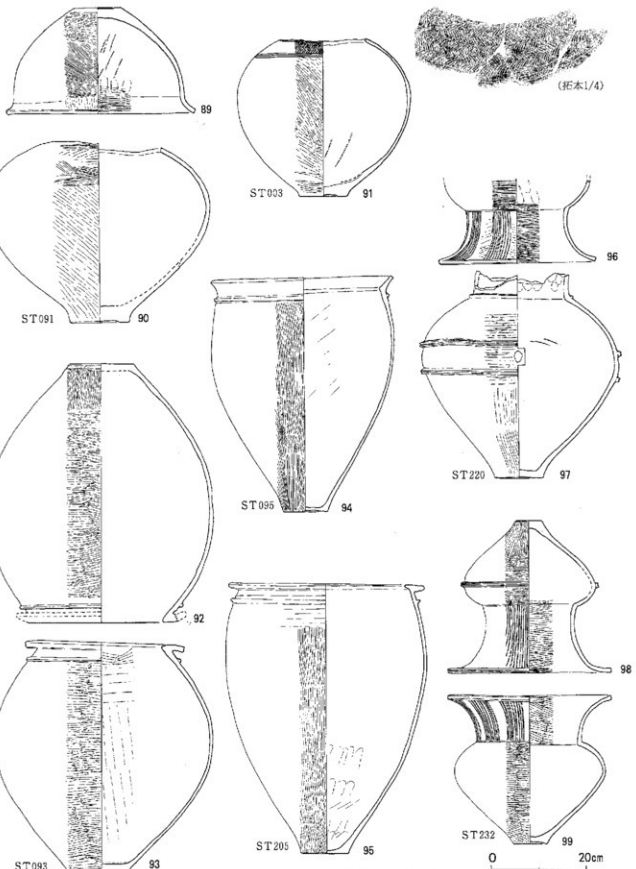


Fig. 31 出土遺物実測図6 (1/8)

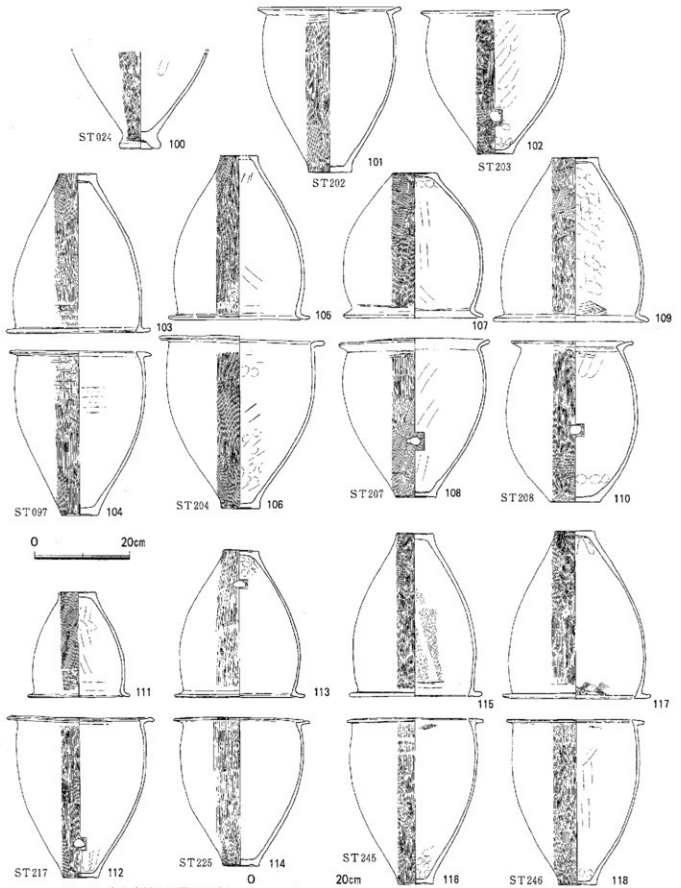


Fig. 32 出土甕棺実測図7 (1/8)

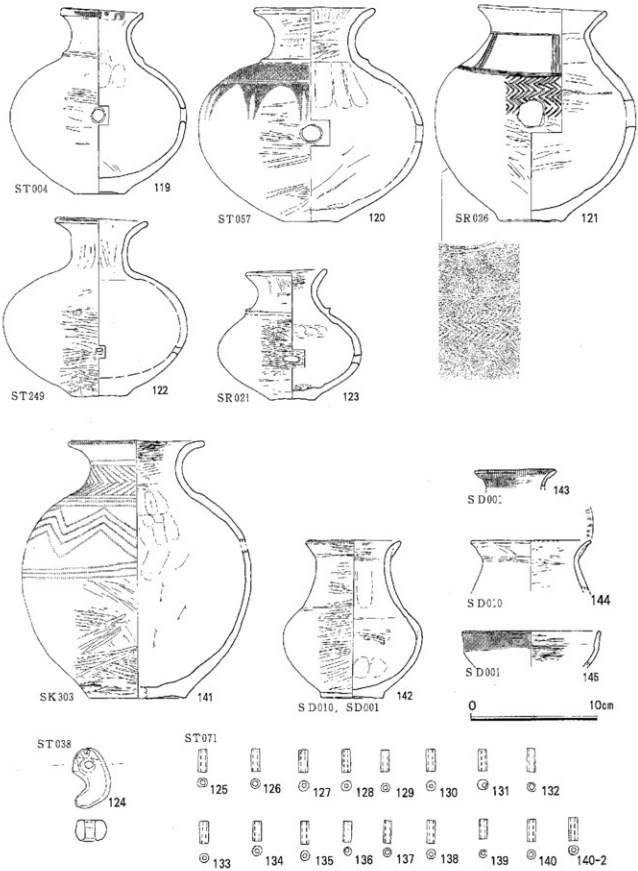


Fig. 33 副葬遺物および彩文土器実測図 (1/3、2/3)

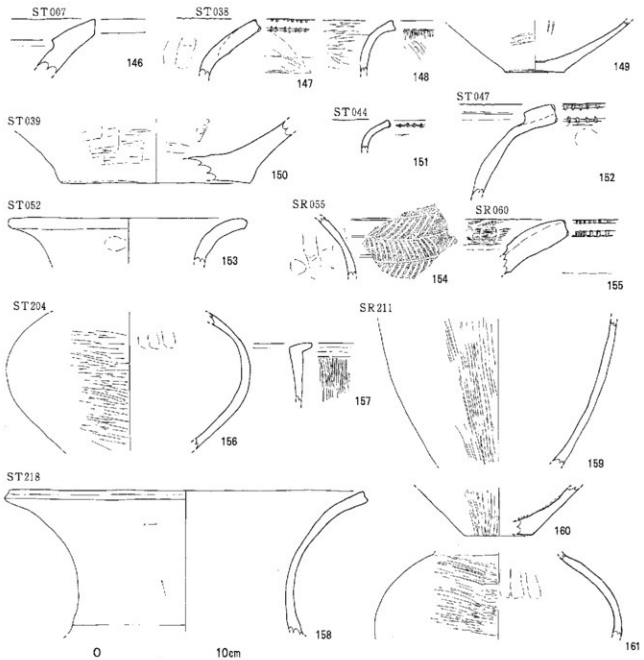


Fig. 34　墓壙出土遺物実測図（1/3）

ピットに切られる。墓であるかはっきりしない。SR055はSR021の北にあり、a上層で南の遺構に切られ、床の一部が赤みをおびる。SR060はGS攪乱305、ST002に切られる。北側の底がやや赤茶けるが赤色顔料と言うほどではない。前期の大壺片155等の小片が出土している。以上は1区で検出した。SR211は調方の中位で段を成し、組み合わせ式の木棺の枠板の痕跡が暗い色調の砂としてはっきり残る。底の北半に底板の痕跡と考えられる淡灰褐色砂層がある。墓坑から甕片159、160、壺片161が出土している。SR212はSR211を切る土壙で墓かどうかははっきりしない。遺物は弥生土器と思われる小片のみ。SR218は楕円形のくぼみの上部に小骨片が数個、広口口縁壺片158が出土した。SR237はSR211、238に切られる。両側に木棺の枠の痕跡がうっすらと見える他ははっきりしない。遺物は出土していない。SR238はSD098に切られ東西に主軸を取る。東側の小口部の段上に角礫が、南北

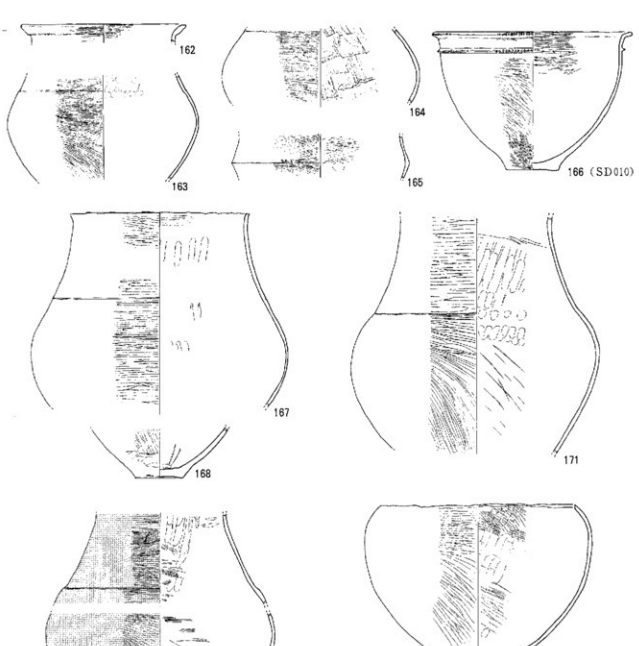


Fig.35 SD001出土弥生土器実測図（1/8）

の側壁底には板状の礫が一個ずつ配置される。木棺の裏込めか。遺物はない。SR239はSD080、ST217、232に切られる。図は浅い2段ぼりだが、棺と考えられる立ち上がりが上部まで見られた。木棺か。弥生土器と考えられる小片が出土した。SR240はSD080の底に床の痕跡のみ検出した。SR241は土坑、ピットに切られる。SR242の2段堀りは上部からのもので木棺の存在を思わせるが、規模

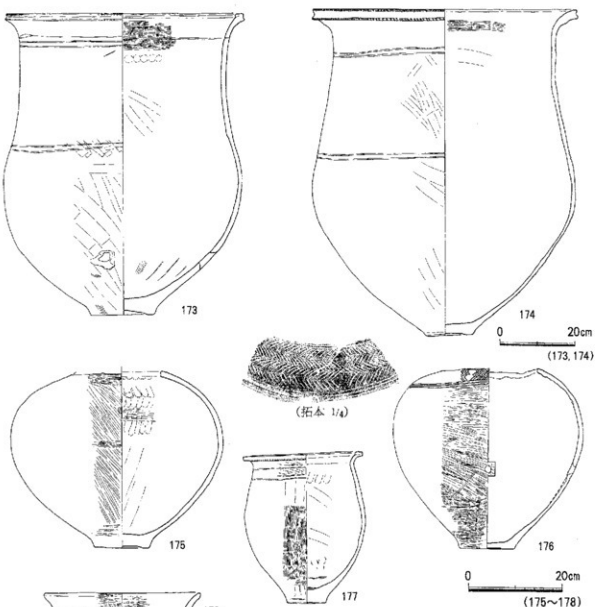


Fig.36 SD010出土弥生土器実測図 (1/10.8)

が小さい。SR248は土坑に切られる。小型で浅い。SR244は東西をGSの攪乱で切られる。浅いくぼみ状に暗褐色砂を覆土とし、南端で頭骨が25cmほど浮いて出土した。長さ3m程あり、プランを確認できていないおそれがある。前期のものと覆土が異なり、地とする暗褐色砂がSQ018にのる。時期不明。SR250は浅い掘り込みに板上の礫が壁状に立つ。小口部かと考えたが対応するものがない。墓の一部と考える。

(4) 石棺墓 (Fig.25)

1区の墓拡墓域外でSQ018を検出した。GSの攪乱で東側の蓋石、小口の石が動きそこから棺内を探ったようような攪乱がある。厚さ4cmほどの板石3枚を蓋石とし、側壁は長方形の板石を少しずつ重ね棺を構築する。小口の石はより長方形に近い。棺材は全て玄武岩である。棺内の長さ240cm、幅45cmほ

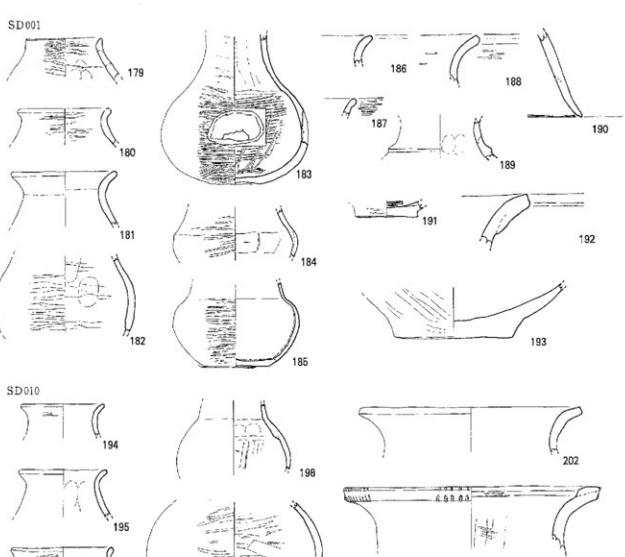


Fig. 37 SD001.010出土弥生土器実測図 (1/3)

どを測る。床は棺頂から40cmほどで側壁のそのレベルより上にうっすらと赤色顔料と考えられる赤みがある。側壁は上がやや内側に傾く。堀方は320×200cmほどの長方形が復元できる。側壁の石を掘える部分を石室床面を囲むように掘り込む。覆土は褐外が暗褐色、内側は灰茶褐色砂である。遺物はなく、骨片が一つ床面で出土した。形態から弥生後期を想定している。

(5)その他の弥生時代遺物

弥生前期、中期の遺構はほぼ例外なく墳墓関連の遺構であるが後世の掘削で失われたものが多い。以下では後世の遺構から出土した遺物をできるだけ図化し、失われた遺構を理解する一助としたい。図示にあったっては、元の位置を少しでも想定できるよう遺構のまとまりをできるだけ生かした。また特徴的なものについて説明を加える。

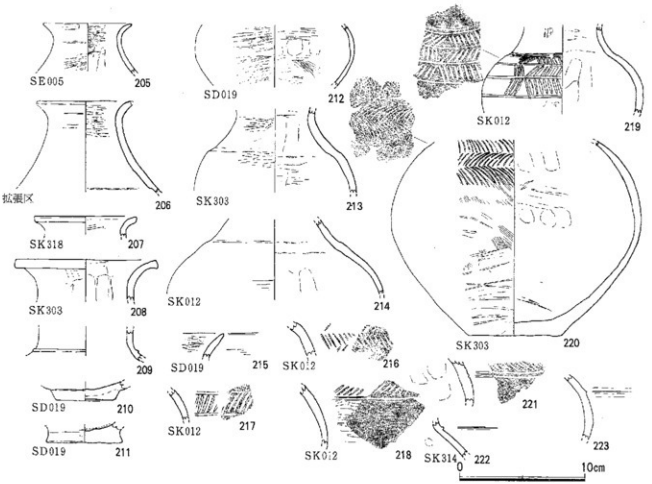


Fig. 38 1区出土弥生土器実測図1 (1/3)

141から145は彩文を施す小壺で141は攪乱壁土斜面に散乱していたものを復元的に作図した。142はSD001と010の破片が接合した。145の顔料は鮮やかに残る。146から161は墓壙出土で各遺構でふれた。

SD001では162から165、168から172、179から193が出土した。172までは板付Ⅱ式までの古手の壺が多く、破片が多く大胆な復元をしたものがある。169は一部床に貼り付き、原位置の可能性もあろう。小壺は179、185のような夜臼系のものがあり、壺棺と共に1区の甕棺群より古い。190は高坏か。一部Fig.7に出土位置を示した。溝の下部に多い。SD010では166、173から177、194から204が出土した。173、174はFig.7右下の様に破片がまとまって出土し、ほぼ完形に接合した。周溝墓の溝、主体部等の掘削時に出土した合口甕棺であろう。今回の調査区出土の組み合わせとしては最も大きい。166、175から177は大破片、完形で出土しFig.7に示した。194から204は1区の遺物に近い。Fig.38、39の205から260は1区出土である。前期、少なくとも金海式までに収まるものが多く、250から253の中期は少ない。出土位置ではSD019、SK012に小壺、大形の甕片が多く、甕棺、木棺墓等の存在を伺わせる。小壺は001を除くと少なくとも20個体弱を数え、失われたものを考慮しても墓の多くに副葬されていたのではないだろうか。甕棺は大型棺の破片はすくなく、中型、小型が多い。すべて合口とすると甕棺だけで少なくとも20基近くがあった計算になる。220と260は2枚貝の腹縁で羽状文を施す。261から290は2区出土の遺物である。こちらでは中期の小型から中型棺が多い。283から290は金海式甕棺、木槨墓に副葬されたものであろうか。小壺も頸部が立ち新しい形態を示す。

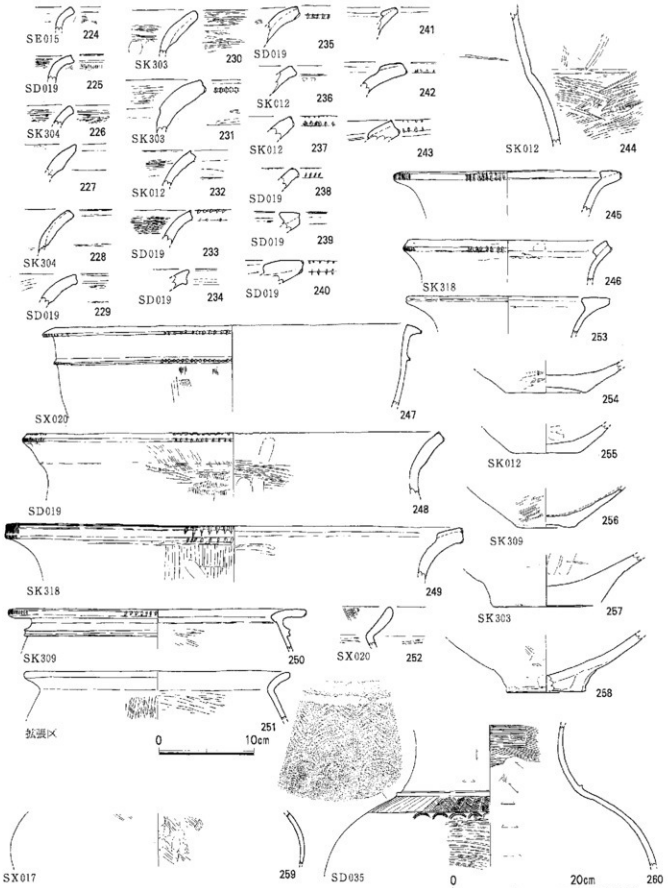


Fig. 39 1区出土弥生土器実測図2 (1/4)

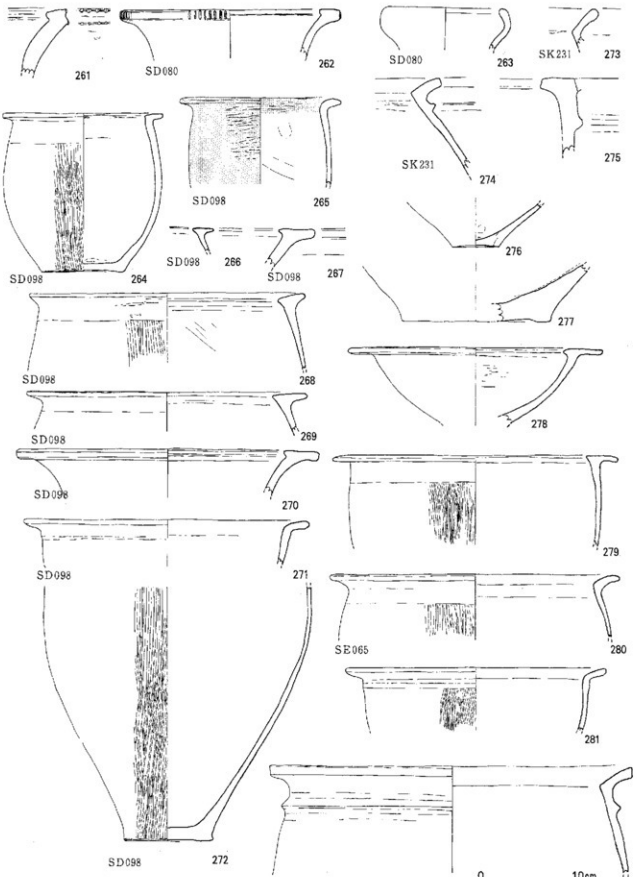


Fig. 40 2.3区出土弥生土器実測図1(1/4)

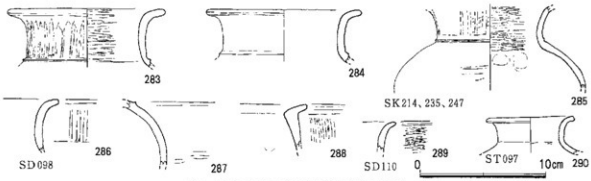


Fig. 41 2.3区出土弥生土器実測図1 (1/3)

4．溝

検出した溝状のうち主なものについてふれておく。時期を決めがたいものが多い。

SD080は2区を東西に横断する溝で東壁で3.7m、西側で3.3mを測る。断面は北側がやや緩やかで南が急である。底に1m強の平坦面がある。2号周溝墓と多くの弥生遺構を切り、北岸は2号周溝墓のプランを示す可能性がある。遺物は弥生土器がほとんどであるが291から297のように陶磁器、土師皿を少量含む。291から296は青磁で291の高台内に墨書が見られる。いずれも上層出土である。297は

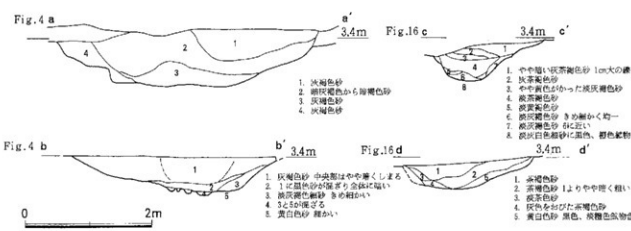


Fig. 42 SD080、035、019土層実測図 (1/60)

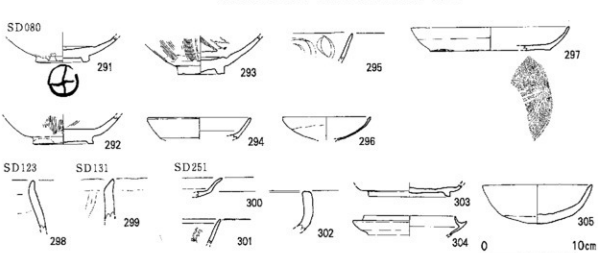


Fig. 43 SD80.123.131.251出土遺物実測図 (1/4)

糸切り底の土師皿で1/4弱からの復元口径16.5cmを測る。遺物が少なく時期は限定できないが12世紀後半以降の中世である。1区ではSD035、019を経て調査区外へ続く一連の溝で。035部分では上端で2m、下端で0.5mと狭まる。国道の南に接する各調査で確認され少なくとも200mは続く。

SD123(付図) 3区上面南東で幅30cm、深さ10cmを測る。遺物は少ない。298は土師器の甕である。

SD131(Fig.4) 3区下面南半で弧を描く。幅は最大で1.5m、深さ40cm。遺物は少ない。299は土師器の甕である。古代の可能性があるが決めがたい。

SD251(Fig.4) 2、3区間を東西に横断する溝で幅1.4mを測りSC150を切る。300から305が出土した。古代の遺物が多い。300、301は青磁、302は土師質、303、304は須恵器、305は土師器の碗形土器である。302は近世以降だが、切り合う溝からの混入の可能性がある。

この他3区上面のSD123、128等は近世以降のものである。

5.生活跡(Fig.44～48)

3区を中心に古墳時代後期の住居を検出した。3区では淡黄褐色砂よりやや高い面で住居のカマドによると考えられる焼土混じりの粘質土が広がる。遺構として把握できたのは下面で8軒である。

SC058(Fig.45、46)は1区の北端で検出し調査区外に延びる。東西長3mを測る。南東部に土混じりの赤みを帯びた砂が台状をなし306、308がかたまった状態で出土した。ただし306はプラン外の破片とも接合し、図示した平面プランは広がる可能性がある。306は移動式カマドで焚き口の底が底までない古いタイプである。外面には深い刷毛目が残る。307、308は土師器の甕である。

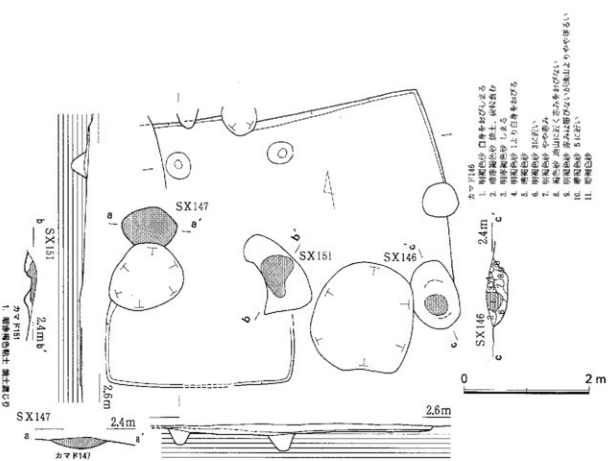


Fig. 44 SC140実測図(1/60)

SC062(Fig.4、46) 1区南東隅で検出した竪穴でトレンチ、SD251に切られる。反転後2区で確認できず、中途半端なプランしかわからない。310から312が出土。310は土師器の甕、311、312は作りは須恵器。

SC108(Fig.45、46) 3区上面の南西隅の黄褐色砂土で検出した。実質下面である。調査区外に延びプランは確認できない。灰褐色砂を覆土とする。須恵器の坏313、土師器甕314が出土した。

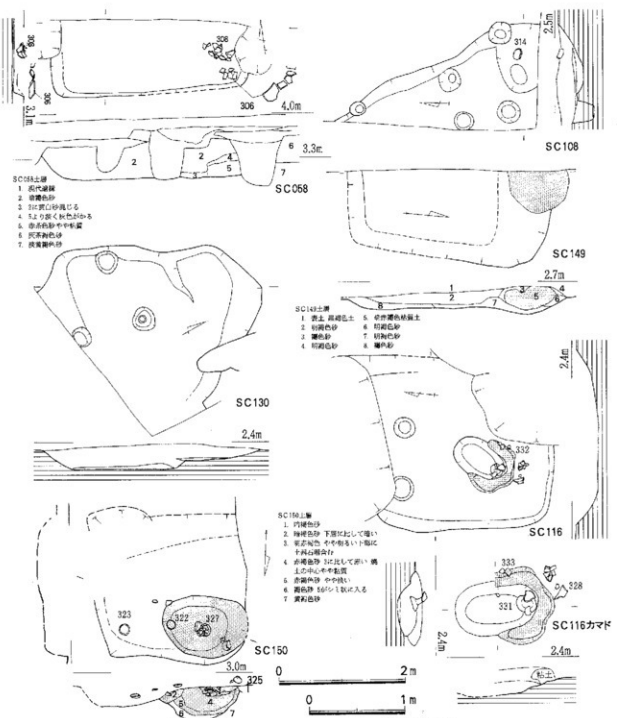


Fig.45 SC058.108.116.130.149.150実測図(1/60、40)

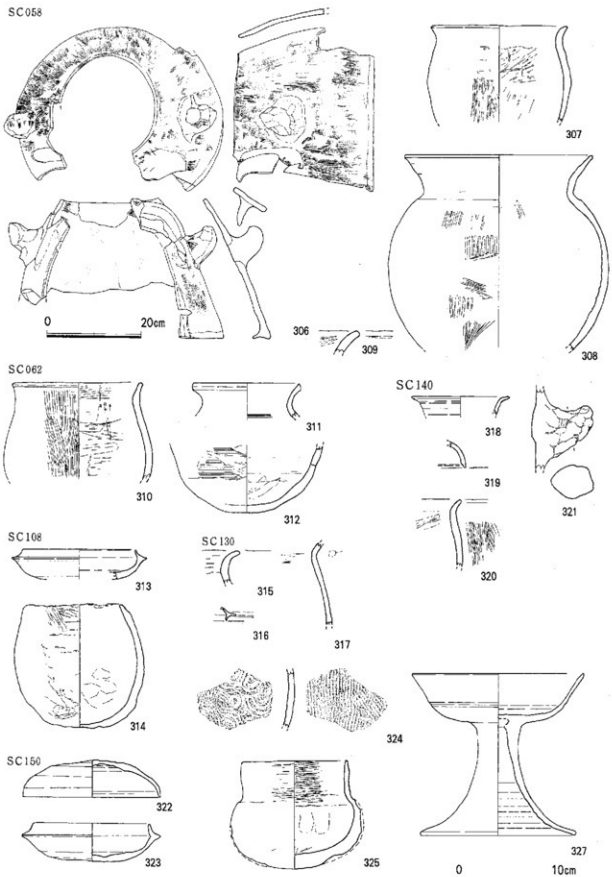


Fig. 46 SC058. 062. 108. 130. 140. 150出土遺物実測図(1/4)

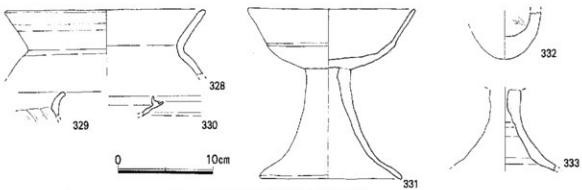


Fig. 47 SC116出土遺物実測図(1/4)

SC116(Fig.45、47) 3区の下面で検出した方形の竪穴で南北側は上面遺構に切られる。南西隅よりやや内側にカマドが良好な状況で残る。前面を80×60cm程の楕円形に、深さ13cmほど掘り込み、その南西半分を焼土混じりの粘土で埋む。その内側には土師器の高坏331が倒置され、329の甕片が出土した。328、蓋331、生焼けの須恵器333はカマドの外東側で出土した。主柱穴は不明。竪穴の大きな部分をカマドが占める。

SC130(Fig.45、46) 3区南東隅で確認した竪穴で住居であるか不確実。古代の甕片を中心とした土器が出土した。青磁が1点あるが混じり込みか。315、317は土師器の甕で、316は須恵器の坏である。

SC140(Fig.44、46)方形プランの一端を確認したがまとまらない。カマドの残骸と考えられる焼土塊が3箇所ある。SX146、147は掘り込みがあり、151は焼土の高まりを成す。318、319は須恵器、320は土師器の甕、321は取手である。

SC149(Fig.45)方形の竪穴の北辺に焼土が入る円形の掘り込みがあり、カマドと考えられる。

SC150(Fig.45、46)暗褐色砂を覆土とする方形の竪穴でSD251に切られる。北辺に楕円形の掘り込みがあり上部の赤く焼けた粘土に倒立した土師器の高坏327、礫などが出土し、周辺から須恵器の坏の蓋

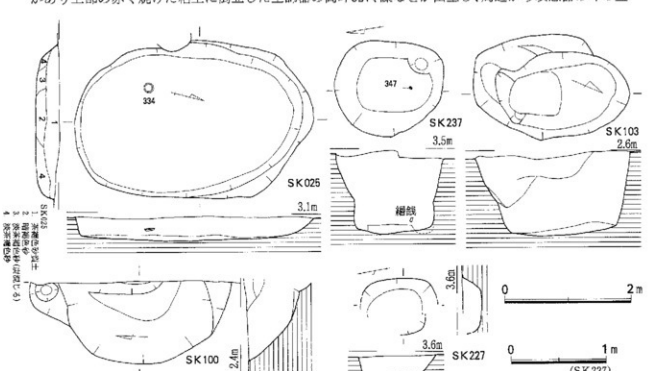


Fig. 48 SK025、100、103、227、237実測図(1/60)

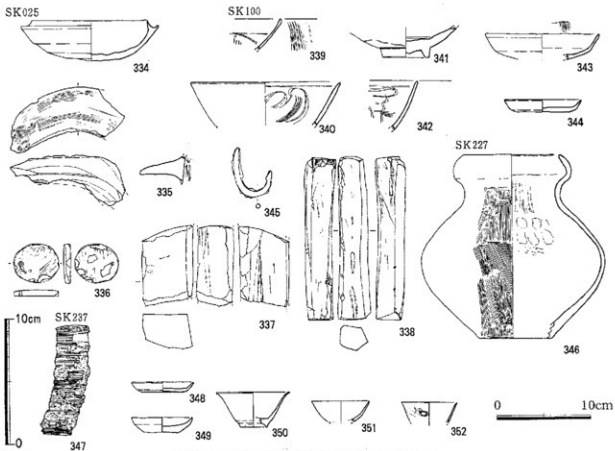


Fig. 49 SK025. 100. 227. 237出土遺物実測図(1/3)

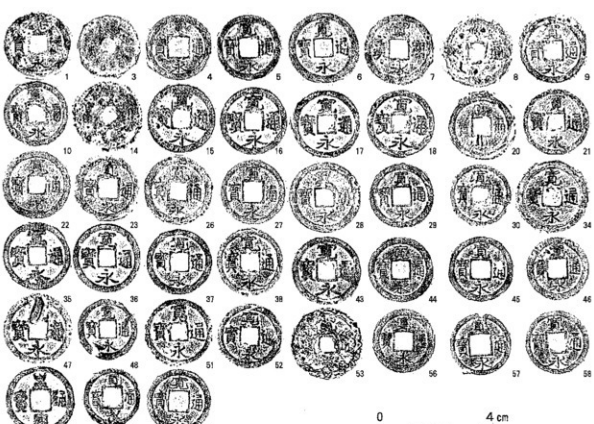


Fig. 50 SK237出土銭拓影(3/4)

322、身323、甕片324、土師器の壺325が出土した。

6．土坑・井戸その他の遺構

これまでふれてきた以外の遺構に土坑、井戸、ピットがある。紙面等の都合で区ごとに概観し、それらのうち代表的なものを取り上げる。遺構番号は付図等の全体図に示したが、特に近代以降で他の遺構との関係で省略したものがある。

1区　GSの基礎を含めて近代以降の土坑の多くを300番台で示した。SE005、015、325は近代以降の井戸でSE325は瓦枠である。上部の掘削しか行っていない。SK006は木枠、釘があり木棺墓状だが床にタイルが数枚出土した。SK025(Fig.48)は楕円形の浅い土坑でSD010を切る。覆土は黒褐色砂で須恵器の坏334、移動式カマドの庇335、滑石製の円盤336、砥石337、338が出土した。

2区　SE065は近代の井戸でSD080．ST094を切る。SD080より北は一帯に近代の掘り込みが遺構面まで達し、甕棺墓等を切る土坑も近代のものである。南側ではSK099、133、135、154が近代、SK209、210、219等は覆土が淡茶、淡灰色砂で木棺墓に近いが、浅く遺物を含まない。

SK237(Fig.48、49、50)楕円形の土坑で表土近くから掘り込む。底にはピット状のくぼみがある。底近くから緡銭347が出土した。61枚からなり長さ8.4cmを測る。差し紐がわずかに残り紙縒と考えられる。複製を作製した。内容は寛永通宝銅製40枚、鉄製1枚(8)、皇宋通宝？1枚(59)、鉄製不明14枚(2、11、12、13、19、24、25、31、32、33、39、40、50、54)、銅製不明5枚(3、41、42、49、55)である。()内は緡銭347の上から各銭に付けた番号でFig.50も同じ。Fig.50－3には花弁文様が見られる。堀方からは近世陶器、土鍋等が出土した。348はヘラ切りの土師皿で口径6．75cm、349は内面クリーム色釉の陶器の皿、350から352は小型の磁器碗である。

SK227(Fig.48、49)ST205の東に隣接する小土坑。覆土は黒褐色砂で、弥生後期初頭の甕346が出土した。

3区上面ではやや大形の土坑が目立つ。SK100は平面半円形分を検出し断面擂り鉢状で魚である。遺物は少なく小片で時期を表しているか不確実である。339から342は龍泉窯系、343は同安窯系青磁、344は糸切りの土師皿で復元口径8.2cm、345は上層出土の鉄製釣り針である。大形の土坑としてはSK103から106、111、113、115等があげられる。遺物が少ないが、SK103、104、113、115で近世陶器が出土している。他も近い時期と考えられる。SK119、120は黒褐色砂を覆土とし8世紀代までの須恵器が少量出土した。SK152は深さ3cmほどに小穀泊滓が溜まる。

3区下面では遺物が出土したものが少ない。SK142、145は黒褐色砂を覆土としSK142から土師器の甕片が出土した。SK148は赤色砂が溝状に見られるが、堀方がはっきりせず遺物の出土はない。

7．その他の遺物

遺構出土遺物になかった時期、種類の遺物を図示する。414から425、429は須恵器で422までは坏と蓋。416体部にはヘラ描きで円が描かれる。422、423は甕の口縁部、424は高坏、425は盤、429は長頸壺である。426から428、430は土師器である。426は甑で胎土が細かく研磨調製を施す。427は移動竈の庇、428甕、430は甑の取手。431は砥長系の瓦質擂り鉢で外面は煤ける。432、433は土鍋で外面に煤付着。434は糸切り底の土師皿で復元口径9.6cmを測る。435から442は土錘である。443はハマ、444、445はトチンある。446は滑石製の人形、447は土製で猿だろうか。448は土師質で型成形の仏像か。449、450は鉄器で449は2号周溝墓のSK236出土の鎌、450はSC140南東出土で刀子か。451、452は縄文土器で451は口縁部内面に沈線を施し外面研磨は丁寧で光沢があり茶褐色を呈す。452は外面ヘラ割り、内面擦過で調製する。453は玄武岩製の石斧で砥石、敲打具に転用されている。454は花崗岩の敲石で表裏中央がくぼみ、縁辺でに敲打痕が残る。皇宋通寶455と咸平元寶456は貼り付いて出土した。この他に鉄銭と緡銭が付いて出土している。

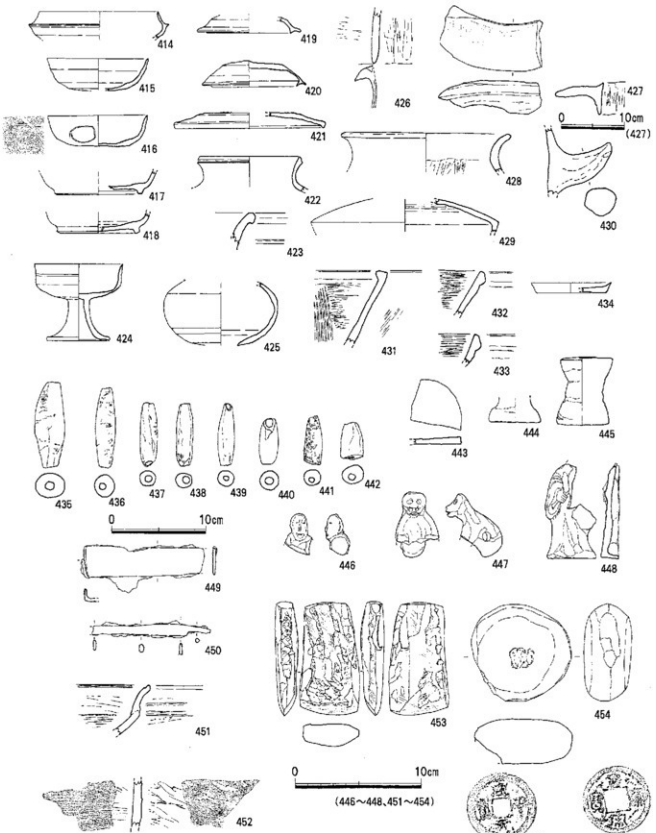


Fig. 51 その他の出土遺物実測図(1/4.3.6.3/4)

Vおわりに

1．周溝墓出土土器とその意義

1号周溝墓出土土器のうち、Fig.13の18～25は久住1999(前掲)のⅡA期に帰属し、畿内大和の纒向遺跡辻土壙4下層や纒向大溝上層資料、箸墓古墳の時期(布留0式)に併行する。これらは主にSD001下層とSD010下層から出土し、遺存率も高いものが多く、鉢・小型壺・高坏と供献的器種でまとまっており、1号周溝墓の埋葬時の祭祀に伴う可能性が非常に高い。一方、1号周溝墓の主体部である箱式石棺からは三角縁神獣鏡の一種である三角縁盤龍鏡が出土しているが、これは雪野山古墳と同型であるが、藤崎石棺出土鏡の方が出土時期が一時期古いと考える(雪野山はⅡB期併行)。この三角縁盤龍鏡は、断面などから新納泉の三角縁神獣鏡型式変遷の3段階に相当すると考えられ(新納泉1991「第4節　権現山鏡群の型式学的位置」『権現山51号墳』)、本資料から布留0式(箸墓古墳築造前後)の時間幅までに、三角縁神獣鏡群のこの段階までの型式が製作され、少なくとも一部は配布されていたこととなる。これは、三角縁神獣鏡の編年や初期古墳の暦年代の議論にとって重要な意義を有する。なお、Fig.14の27～29の山陰系二重口縁壺は外面上半が赤彩され、あるいはこれを周溝墓の時期とする向きもあろうが、それは難しい。口縁部にシャープさが欠けてきていること、頸部が太く短いこと、内面のケズリがやや雑で湾曲気味の器面で平滑ではないことから新しい型式で、30・31の布留系甕と同様のⅢA期新相(布留式中相後半)である。この時期は藤崎遺跡(墓地)の集落である西新町遺跡の遺構が激減する時期で、藤崎遺跡でもこの時期に下る方形周溝墓は無く(ⅢA期古相まではある)、最大級でもっとも良い立地の1号方形周溝墓がまるで予定されたかのように最後にここに築造されるというのは考え難い。またこれらの出土層位の多くが上層であることも注意されよう。おそらく、最初の始祖的な墓に対して、後世に祭祀を行ったものと考えておきたい。なお、各方形周溝墓の出土土器に異系統ないし搬入品が含まれることが注意される。20は山陰地方から、34は東海地方(伊勢湾岸？)からの可能性がある。32は器形の発想は紀伊半島東南部の壇型土器から(技法は精製器種B群で模倣とは異なるか)、43も紀伊半島西南部の鳥羽系二重口縁壺の器形の模倣(技法は山陰系)と思われる。胎土・色調・調整から31・35・38・40は糸島平野付近の製作の可能性があり、24・37・45は福岡平野の中枢域(博多ないし比恵遺跡群周辺)の製作である。方形周溝墓の葬祭(後述の墓前祭祀も含めて)に際し、被葬者の広範囲の交流が反映していると言えよう。

2．周溝墓出土土器以外の遺構と遺物

古墳時代前期では周溝墓を3基検出し1号周溝墓が明治45年発見の箱式石棺であると考えた。その結果、Fig.52のような方形周溝墓の分布がより鮮明になった。その意義は1でふれたとおりである。

弥生時代では甕棺墓、木棺墓・土壙墓が密に出土した。Fig.53に甕棺のみ分布を示した。後世の攪乱がなければ80基近くが存在したのではないだろうか。特に1区では金海式までが集中することが確認できる。さらに、ここに中期以降、立岩式の1基以外に甕棺が埋葬されず、墳丘、区画等で区された墓域を避けたようにもとれ、本文中にふれたSD047がその区画溝と考えられる。古墳時代の周溝墓が最初にここに作られるのも、この墓域が地形や意識として残っていたためと考えられないだろうか。木棺墓・土壙墓も多く検出できた。いずれも金海式までのもので、夜臼式から始まる27地点付近から今回の地点では、甕棺とともにこうした形態の墓で墓域が構成される。また、今回は伯玄、金海式甕棺から比較的良好な残りの人骨が出土したことは注目される。他の甕棺の覆土からも歯などが餡い選別の結果出土した。

古墳時代後期ではカマド付きの住居を検出した。焼土の分布を考えると相当数の住居があったものと考えられる。中世、近世以降については掘立柱建物等ほとんどふれることができなかった。

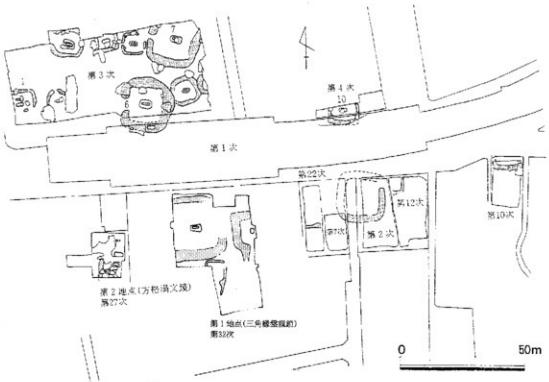


Fig. 52　藤崎遺跡方形周溝墓分布（1/1500）　（藤崎12を一部改変）

Fig. 53　藤崎遺跡出土甕棺墓分布図（1/1500）

付　論1

藤崎遺跡出土の素環頭大刀に付着する織物

東京国立博物館　沢田むつ代

大刀（Fig.9）には表面（織物の付着が多い面）から背、裏面（織物の付着が少なく、砂が多く付着する面）へかけて織物が随所に付着している。これらの織物は、とりわけB－4の表面が顕著で、この部分では複数の織物が層を成して重なっているのが確認される。さらに、それに続くB－3では種類の異なる織物が経糸方向を異にして重なりあっている。付着している織物はすべて平織の絹織物、いわゆる平絹である。特に注目される点は、B－4の一番上面に付着している平絹で、1㎝間の織り密度は一方の端近くで経糸110～120本程度（他の部分では80～90本程度を数える）、緯糸30越前後（以下、経糸の本数×緯糸の越数で表記）という非常に高密度の平絹（aと仮称）である。この平絹の上には、ごく小片の平絹（aと同種と思われる）が付着しており、直線になる端には織物の端にあたる織耳が遺存しており貴重である。通常、織耳に近い部分は、経糸が引き寄せられて細密となることから、aの高密度の平絹は、他の部分で計測しても80～90本を数えるため、あるいは端の部分が織耳に近いことが推測される。いずれにしても、非常に細密な平絹といえる。この平絹には中程に欠損があり、その部分には別の平絹（40～50×30前後）がみえる。また、B－3の部分にも織り密度の異なる複数の平絹の重なりがみられ、一番鮮明に遺っている平絹は、1㎝間の織り密度が50×30前後を数える。さらに、背に近い部分では、平絹が複雑に褶曲しているのが確認され、この部分の平絹には、緯糸の密度がやや粗い平絹もみられる。

古墳出土の大刀や剣などは鞘に収め、鞘木の安定化を図るため組紐や紐状にした平絹などで斜め方向にきっちり巻き包む場合もあれば、抜き身のままで巻き包む例もある。なお、組紐には装飾的な意味合いも兼ね備えていたことであろう。しかし本大刀は、複数の平絹が重なり、しかも一部では褶曲する箇所がみられることから、大刀を巻いたり包んだりという使用法よりむしろ、他に用いられたものが大刀に付着したとみるべきであろう。しかし、大刀に接した面の織物（重なり部分にあっては、現状からでは確認できない）の経糸方向が、大刀に対して斜め（大刀などを巻き包む場合は、経糸方向を斜めに扱う場合が多い。こうした方が巻きやすい）になっているかどうか判然としない。

以上のことから、本大刀に付着する複数の平絹の多くは、別の用途に使われたものが大刀へ付着して遺ったと推定される。とりわけ細密な平絹は、他の平絹やこの時代の出土平絹と比べ格段に上質と考えられることから、舶載品の可能性も考慮すべきであろう。

付記　本大刀の調査については、東京国立博物館文化財部列品課列品室の時枝務氏の御高配を賜りました。記して感謝申し上げます。

図1　B－4の部分

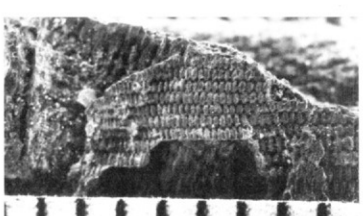


図2　高密度の平絹　1目盛は0.1cmを表わす

付　論2

藤崎遺跡32次調査出土の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター　比佐陽一郎

藤崎32次調査では、墳墓の主体部と考えられる遺構で、赤色に発色する砂や石材片が認められた。古代の埴輪では葬送儀礼として赤色顔料の使用が知られており、今回検出された各遺構での顔料使用の有無やその使用状況を知ることを目的として、遺構内より採取された砂と、調査で検出された石棺部材の一部と目される板石片に付着する赤色物の調査も行った。

遺構内の砂は、遺構012の主体部内と墓壙内の複数箇所から採取された23試料、及び遺構026より2試料、遺構052、055より各1試料、遺構060より赤く見える部分とそうでない部分各1試料の合計29試料である。この内、No.17や22では明らかな顔料の粒子や塊が肉眼でも見ることができるが、それ以外は、全体がぼんやりと赤く色付いたように見える程度である。しかし実体顕微鏡(倍率10～40倍程度)を用いると、砂の表面に顔料の微粒子が付着している様子が観察できるものが幾つか見受けられる。これらには朱と見られるもの(No.２・５・10～12)、ベンガラと推測されるもの(18・19)、両方存在するもの(１・４)があるが、どちらか判別、あるいはそれ以前に顔料か否かの判別が困難であったり、その存在がきわめて少量であるサンプルもある。更に、顕微鏡観察でも顔料の粒子が見あたらないサンプルも少なくない。詳細は一覧表を参照されたい。本来ならば、より高倍率の顕微鏡により粒子そのものを観察することで、詳細な同定が可能な場合もあるが、装置的な限界もあり現状では今後の課題とせざるを得ない。

石材は遺構012に伴うもので、15×６cm、厚さ１cm前後の板状を呈し、肉眼でも両面に赤色の部分が認められるが、その範囲は各面まちまちである。これらは実体顕微鏡観察により、石材自身が部分的に変色したようなものではなく、ベンガラと思われる顔料が付着した状況と見られる。

次に蛍光X線分析による材質調査を行った。この方法は試料にX線を照射し、含有する各元素から発生する二次X線(特性X線)を検出器でとらえてX線エネルギーとその強度をピークとして表すものである。古代の顔料は酸化第二鉄を主成分とするベンガラと、硫化水銀を主成分とする朱が知られており、蛍光X線分析ではそれぞれ鉄(Fe)、水銀(Hg)が主要元素として検出されることになる。ただしベンガラの場合、土壌や岩石中にも鉄分が含まれることから、鉄の検出のみをもってベンガラの存在を判定することにはならない。分析は福岡市埋蔵文化財センターの大型資料用波長分散型蛍光X線分析装置(フィリップス：PW-2400改)を用いた。資料となる砂はプラスチック製のサンプルホルダーにポリプロピレン製の膜を敷いて、そこに３ｇ程度入れた状態で分析している。なお事前に砂を入れない空の状態で分析を行い、サンプルホルダーや樹脂膜から調査対象となる鉄や水銀のピークが検出されないことを確認している。石材片はそのままの状態で装置に設置、非破壊で分析している。測定条件は次の通り。

対陰極：スカンジウム(Sc)／印加電圧・電流：30～60ｋV・50～100mA／測定雰囲気：真空／測定範囲20mmφ／分光結晶：フッ化リチウム・ゲルマニウム・ＰＥＴ・金属多層累積膜／検出器：シンチレーション計数管・ガスフロー検出器

分析結果は砂や岩石の主成分である珪素のX線強度を100とした場合の、鉄、水銀のX線強度を相対値として示す。まず資料No.１、２、５、11、13、16、23において水銀のピークが認められた。これらは全て遺構012から採取されたサンプルである。特に13と23は相対強度値が３を超えており、強い

値を示している。このことは概ね実体顕微鏡による観察結果と合致しているが、No. 12では朱と見られる粒子が認められながら、水銀のピークとしては検出されていない。またNo. 22では極端に強い鉄のX線強度が得られており、この顔料がベンガラであることが裏付けられた。

これに対して観察で明瞭なベンガラ粒子が認められるNo. 17～19では、特に鉄のX線強度が強い傾向は認められておらず、また参考までに行った遺跡と関係ない西区大原海岸の砂の分析では、遺跡内の砂と同様の数値が得られており、分析の数値のみによる判断が困難なことも示された。このことは石材片の分析にも当てはまる。X線強度自体は砂よりも遥かに高い数値が得られているが、顔料付着部分と、そうでない部分の差はほとんど無く、元々が鉄分を多く含む石材であると考えられる。

遺構012では、水銀が検出されたサンプルの採取位置を見ると、2を超える高い値を示すものはいずれも主体部の東側に集中しているという傾向が看取される。また分析では水銀が検出されなかったが朱と見られる粒子が存在するNo. 12も東側グループのサンプルであり、被葬者の埋葬状態を考える上で興味深い結果となっている。またベンガラに関しては分析では良好な結果が得られなかったが、観察により特に濃密な粒子が認められた17～19は、いずれも掘り方部分のサンプルである点も示唆的である。石棺石材へのベンガラ使用が認められることから、石棺に使用されていたものが掘り方内に落ちたか、或いは掘り方も含めた主体部全体に蒔かれていた可能性が想定される。

X線強度(珪素を100とした場合の相対値)

	遺構	サンプル名(採取場所)	Si(珪素)	Fe(鉄)	Hg(水銀)	実体顕微鏡観察による所見
1	012	1(主体部東端南)	100.00	32.77	2.20	朱・ベンガラ微粒子の付着した砂粒有り。
2	012	2(1の西隣)	100.00	58.82	2.16	朱有り。ベンガラは見られない。
3	012	3(主体部中央南)	100.00	43.08	-	明らかな顔料としては見当たらない。
4	012	4(3の西隣)	100.00	39.61		朱、ベンガラが付着した砂粒が僅かに含まれる。
5	012	5(主体部西端南)	100.00	53.01	1.06	朱の付着した砂粒有り。
6	012	6(主体部東端中)①	100.00	54.11	-	顔料粒子は認められない。
7	012	6(主体部東端中)②	100.00	40.53	-	顔料粒子は認められない。
8	012	7(6の西隣)	100.00	35.45	-	顔料粒子は認められない。
9	012	8(主体部中央中)	100.00	38.81	-	顔料粒子は認められない。
10	012	9(8の西隣)	100.00	63.07	-	顔料粒子は認められない。
11	012	10(主体部西端中)	100.00	59.98	0.39	朱?の付着した砂粒有り。
12	012	11(主体部東端北)	100.00	38.65	-	朱らしき顔料微粒子の付着した砂粒が比較的多数有り。
13	012	12(11の西隣)	100.00	61.28	3.94	朱付着の砂粒が多数(全体の中で最も濃密)。ベンガラも含まれる?。
14	012	13(主体部中央北)	100.00	53.04	-	朱?の付着した砂粒有り。
15	012	14(13の西隣)	100.00	54.61	-	顔料粒子は認められない。
16	012	15(主体部西端北)	100.00	61.42	0.71	全体に淡橙、淡赤色微粉末の付着する砂が認められるが顔料か否か不明。朱の付着したものも少数あり。
17	012	掘り方内a(北側)	100.00	54.04	-	明瞭なベンガラ粒子を含む。
18	012	掘り方内b(北東側)	100.00	35.12	-	明瞭なベンガラ粒子を含む。
19	012	掘り方内c(南側)	100.00	35.33	-	明瞭なベンガラ粒子を含む。
20	012	橙色砂サンプル	100.00	65.67	-	顔料粒子は認められない。
21	012	赤色砂サンプル	100.00	58.56	-	顔料粒子は認められないが、全体が赤っぽい。
22	012	注記なし	100.00	233.63	-	明らかなベンガラ塊を含む。
23	012	主体部東側任意	100.00	57.28	3.75	散発的に朱微粒子の付着した砂粒が認められる。
24	012	石材片赤色部	100.00	113.58	-	ベンガラ粒子の付着が認められる。
24	012	石材片通常部	100.00	113.92	-	――――――
25	026	東側	100.00	52.68	-	赤色微粒子の付着した砂粒有り。識別不明。
26	026	西側	100.00	56.19	-	赤色微粒子の付着した砂粒有り。朱か?。
27	052		100.00	92.27	-	ベンガラ状の微粒子が付着した砂粒有り。
28	055		100.00	55.21	-	赤色微粒子の付着した砂粒有り。朱か?。
29	060	通常部	100.00	41.26	-	顔料粒子は認められない。
30	060	赤色部	100.00	103.73		淡橙色に発色する砂が多いが顔料粒子は認められない。
	参考	西区大原海岸の砂	100.00	39.86	-	――――――

分析対象資料とその結果

この他、026、052、055ではいずれも顔料と見られる粒子の付着した砂が認められる。分析で水銀が検出されていないが、朱と思しき色調のものもあり、その同定にはより精密な調査が必要である。

060の2サンプルは、通常の砂(No. 28)と赤く見える砂(No. 29)ということで採取されており、分析では後者の鉄の数値が強く表れている。しかし顕微鏡では両者とも顔料の存在は認められず、No. 29は砂粒そのものが橙色に発色している状況が観察されており、鉄分を多く含んだ砂が凝集したものと考えられる。ただし、この結果は、朱やベンガラという考古遺物としての顔料が存在しないというだけであって、赤っぽい砂を意識的に使用している可能性までも否定するものではない。

付　論3

福岡市藤崎遺跡第32次調査出土人骨

九州大学大学院比較社会文化研究院　中橋孝博

はじめに

福岡市の西部、早良区の藤崎から百道浜一帯のかつての砂丘上(標高5～6m)に位置する藤崎遺跡では、これまで既に30次を越える発掘調査が実施され、種々の考古遺物、遺構はもとより、弥生時代を中心とした人骨資料も豊富に出土している。藤崎遺跡の発見は古く明治45年(1912年)に遡るが、そのきっかけとなった藤崎古墳を含む一帯が、2003年度、改めて福岡市教育委員会によって発掘調査され、三角縁複波文帯盤龍鏡などが副葬されていたことで著名な箱式石棺の他、新たに弥生時代の人骨資料も追加発見された。

今回の調査結果で特に注目されるのは、その所属時代が弥生時代前期末から中期初頭に遡るものが相当数含まれる点である。周知のように北部九州では縄文晩期～弥生初期の人骨資料が欠落しており、当地の人類学上の重要懸案の一つとなっているが、今回の追加資料は不十分ながらその空白の一部を埋めるものとなろう。以下、人骨を精査して明らかになった点を報告する。

遺跡・資料・方法

藤崎遺跡第32次調査の対象になったのは、早良区藤崎一丁目12-1～2に広がる、標高5～6mの砂丘上に営まれた墳墓群である。前述のように、明治45年発見の箱式石棺の一部が検出された他、木棺墓や多数の甕棺墓が出土した。副葬品や甕棺の型式に関する考古学的な検証から、木棺墓は弥生時代前期末、甕棺墓については表1に示したように、前期末から中期のものを含んでいる。

人骨は計23個体出土した(表1)。石棺墓が2基、土壙墓(古墳時代?)が1基含まれるが、他はいずれも甕棺墓の被葬者である。甕棺の所属時代はいわゆる伯玄式の前期所属のものから前期末～中期初頭の金海式、及び中期中頃のものが含まれている。一部に赤色顔料が付着している個体もあるが、副葬品は殆ど見られない。

人骨の計測は、主にMartin-Saller(1957)に、鼻板部については鈴木(1963)の方法に従った。また、性判定には、筆者らの保存不良骨に対する方法(中橋、1988)を援用した。

結果

一部計測可能であった個体については、その結果を比較群と共に表2～5に示した。以下、比較的保存良好な事例について概括する。

1．004号甕棺墓人骨

弥生時代前期末のいわゆる伯玄式甕棺の被葬者である。副葬品は無かったが、上顎骨の口蓋前部に赤色顔料の付着が認められた。上・下顎骨の一部や頭蓋底などに欠損が見られるが比較的保存が良く、大部分の体部骨も遺存している。骨盤形状から女性と見なされ、また歯の脱落、歯槽吸収部が多く、縫合の癒合も進んでいることから、老年に達していた可能性が高い。後述する96号甕棺人骨との関係から見て、この女性には抜歯風習の痕跡が見られても不自然ではないが、上、下顎とも欠損や変形が著しく、残念ながら確認できなかった。

頭蓋の計測結果を表3に、四肢骨のそれを表4、5に示した。概ね既存の北部九州弥生人の平均値に近く、鼻根部も非常に扁平(鼻根彎曲示数：95.0)で、明らかな高眼窩傾向が認められる。大腿骨の骨体上部、及び脛骨にやや扁平性が見られるが、北部九州弥生人として特に目立つ変異とは言えない。

2．096号甕棺墓人骨

弥生前期末～中期初頭の金海式甕棺の被葬者で、今回出土した人骨中、最も保存状態が良好である。骨盤、及び四肢形状から女性と見なされ、歯の咬耗が比較的弱く、縫合の癒着も見られないことから成年期に属す個体と推測される。

以下の歯式に示すように、この女性には明確な抜歯痕が確認された。上顎の両側犬歯と、下顎の4本の切歯を抜去しており、津雲貝塚や吉胡貝塚などを代表例として西日本の縄文時代晩期に盛行した型式に一致する。弥生時代でも、これまで佐賀県の大友遺跡(松下、1981；中橋、2003)や弥生早期の志摩町新町遺跡(中橋・永井1987)、及び弥生前期の福岡市雀居遺跡(中橋、2000、2003)の土壙墓から出土した人骨などで同型式の抜歯例が確認されているが、甕棺墓から出土した人骨では初めての事例となるものである。

M^3	M^2	M^1	P^1	P^2	×	I^2	I^1	I^1	○	×	P^1	P^2	M^1	△	○
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	×	×	×	×	C	P_1	P_2	M_1	M_2	×

(○：歯槽解放、／：欠損、×：歯槽閉鎖)

形態的特徴として、やや上顔高が周辺の甕棺墓人骨平均値より下回るが(表3)、幅径との関係で見た上顔示数に大差はない。また鼻根部(彎曲示数：90)はやはり平坦で、眼窩示数も比較的高く、縄文人や西北九州弥生人とは差が認められる。四肢骨でも概ね北部九州弥生人の平均に近く、骨体断面も含めて特に目立った変異は見られない(表4、5)。ただ、大腿骨最大長からピアソンの推定式で求めた身長は149.3ｃｍで、西北九州弥生人(147.9cm)よりは上回っているものの、北部九州弥生人の平均(151.2cm)には及ばない。

なお、当人骨には左の頸関節異常と、やはり左の鼻涙管に病的変化が認められた。

3．207号

弥生中期後半のものとされる、通常は小児埋葬用の小型甕棺に頭蓋骨のみ埋葬されていた事例である。眉間部や各筋付着部の発達度、サイズの大きさからみて男性であり、歯の咬耗がかなり進行し、縫合にも一部癒合が始まっていることから、熟年期に入った個体と見なされる。

計測結果を表2に示した。脳頭蓋はかなり長頭傾向を見せ、その長幅示数は73.4と低い。顔面部では著しい高顔傾向がまず目に付く。眼窩型はむしろ低めだが、鼻型はかなり狭鼻傾向を示し、鼻根部も扁平性が著しい(彎曲示数：88.4)。形態的には凝灰岩周辺の甕棺弥生人と共通の特徴を持つ個体と言えよう。なお、人為的な傷、及び抜歯風習の痕跡は確認出来なかった。

総括・考察

福岡市の藤崎遺跡第32次発掘調査によって、計23体の人骨が出土し、幾つか興味深い事実が明らかになった。

まず、小児棺に成人男性頭蓋のみを埋葬した事例が追加された点を上げておきたい。類似例は福岡

市や筑紫野市などで既に幾つか報告されているが、いずれも成人男性であり、今のところ時代的にも中期以降のものに限定されている。周知のように北部九州では、首離断例や石鏃嵌入例など、多くの戦傷人骨が検出されているが、この特異な埋葬例もまたそうした当時の社会背景を窺う上で貴重な手がかりとなろう。

今回の発掘資料でもう一つ最後に触れておきたいのは、北部九州の甕棺墓の被葬者において、初めて上顎両犬歯と下顎の切歯4本を抜く風習的抜歯痕が確認された点である。前述のように従来は縄文人集団、もしくはいわゆる西北九州タイプの人骨に伴うとされたこの抜歯形式が、甕棺分布域である北部九州でも弥生時代の初期には、面長で扁平、高身長などを特徴とするいわゆる渡来系弥生人に伴って見出されることは、先の雀居遺跡出土人骨(中橋, 2000, 2003)で指摘していたことである。今回、初めて初期の甕棺墓でも同型式の抜歯が確認されたことは、西日本の縄文晩期に盛行したこの型式の抜歯風習が、当地の少なくとも弥生初期社会においてはかなり普遍的に存在した可能性を示唆するものと言えよう。弥生前期末以降の人骨に見られる縄文人との大きな形態的違い、不連続性と、この風習文化に見られる連続性をどのように理解し、解釈すればよいのか、抜歯風習を巡るこの問題は今後とも空白期の人骨資料を充実させながら検討を続けていく必要のある懸案の一つである。

表1　藤崎遺跡第32次調査出土人骨

番号	埋葬施設	時代	性	年齢	遺存部位	備　考
4	甕棺	伯玄	女性	老年	ほぼ全身	赤色顔料付着
7	甕棺	金海	?	?	歯、四肢骨片	
8	甕棺	金海	?	幼児		4−5歳
12	石棺	古墳	?	成年?	歯	
13	甕棺	金海?	男性	熟年	頭蓋片、歯、四肢骨片	
14	甕棺	前期?	?	?	部位不明骨片	
18	石棺	弥生?	?	?	部位不明骨片	
38	甕棺	前期	?	?	部位不明骨片	
39	甕棺	中期	?	成年	歯	
45	甕棺	前期	?	未成人	歯、骨片	
46	甕棺	前期	?	幼児	歯	
48	甕棺	前期	?	乳児?	頭蓋骨片	
71	甕棺	金海	?	?	歯、骨片	
90	甕棺	金海	?	成人	歯、骨片	
91	甕棺	前期	?	?	歯	
93	甕棺	中期	?	小児	歯、下肢骨片	
96	甕棺	金海	女性	成年	ほぼ全身	鼻涙管拡張、顎関節異常 抜歯
202	甕棺	中期	?	?	部位不明骨片	
207	甕棺	中期	男性	熟年	頭蓋	頭蓋のみ
208	甕棺	中期	?	幼児	歯	2−3歳
225	甕棺	中期	?	?	歯	
244	土壙?	古墳?	男性	熟年	頭蓋片	
245	甕棺	中期	?	?	歯、骨片	

文　　献

阿部芙世（１９５５）：「現代九州人大腿骨の人類学的研究」、人類学研究２。

池田次郎（１９８８）：「吉備地方海岸部の縄文時代人骨」、考古学と関連科学（鎌木義昌先生古希記念論集）。

鑓鍋倉達（１９５５）：「九州人下腿骨の研究」、人類学研究２。

金関丈夫・永井昌文・佐野一（１９６０）：「山口県豊北町土井ヶ浜遺跡出土の弥生式時代人頭骨」、人類学研究７。

金高勘次（１９２８）：「吉胡貝塚人骨の人類学的研究」、人類学雑誌４３。

清野謙次・宮本博人（１９２６）：「津雲貝塚人人骨の人類学的研究、第２部、頭蓋骨の研究」、人類学雑誌４１。

Martin-Saller(1957)：Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.

松下孝幸（１９８１）：「佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨」、大友遺跡、佐賀県峰子町文化財調査報告書１。

溝口静男（１９５７）：「現代九州日本人前腕骨の人類学的研究」　人類学研究４。

内藤芳篤（１９７１）：「西北九州出土の弥生時代人骨」、人類学雑誌７９。

中橋孝博・永井昌文（１９８７）：「福岡県志摩町新町遺跡出土の縄文・弥生移行期の人骨」、志摩町文化財調査報告書７。

中橋孝博・永井昌文（１９８９）：「弥生人の形質、男女差、寿命」、弥生文化の研究１、雄山閣出版。

中橋孝博（２０００）：「福岡市雀居遺跡（第７・９次調査）出土の弥生前期人骨」、福岡市埋蔵文化財調査報告書第６３５集。

中橋孝博・国崎健治（２００３）：「福岡市雀居遺跡(第１０～１３次調査)出土の弥生前期人骨」、福岡市埋蔵文化財調査報告書７４８。

中橋孝博（２００３）：「大友遺跡第６次調査出土人骨」、佐賀県大友遺跡II（日本人および日本文化の起源に関する学際的研究：考古学資料集３０）。

中橋孝博（２００３）：「鹿児島県種子島広田遺跡出土人骨の形質人類学的所見」、種子島広田遺跡、鹿児島県立歴史資料センター黎明館。

専頭時義（１９５７）：「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」、人類学研究４。

鈴木　尚（１９６３）：「日本人の骨」、岩波新書４７７。

表2　主要頭蓋計測値の比較（男性）

		藤崎32（弥生）	北部九州1)（弥生）		南九州2)（古墳）		西北九州3)（弥生）		広田4)（弥生）		津雲・古浦5)（縄文）		西南日本6)（現代）	
		207	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	頭蓋最大長	193	118	183.7	10	181.8	21	182.8	23	164.4	60	184.2	108	181.4
8	頭蓋最大幅	141	117	142.4	12	142.8	20	144.9	23	146.8	62	144.9	108	139.3
17	Ba-Br高	139	101	137.7	15	136.3	15	134.6	15	129.9	26	135.5	108	139.3
8/1	頭長幅示数	73.4	104	77.7	5	78.6	20	79.2	23	89.4	55	78.7	108	76.6
17/1	頭長高示数	72.0	91	75.3	9	75.0	15	74.2	15	79.0	25	73.3	108	76.9
17/8	頭幅高示数	98.5	91	97.0	8	96.1	14	93.1	15	88.4	26	93.6	108	100.1
45	頬骨弓幅	(138)	103	140.0	8	139.5	12	138.4	7	137.7	16	141.0	106	134.5
46	中顔幅	-	114	104.7	15	101.5	17	105.0	8	98.9	31	103.8	107	99.9
47	顔高	-	80	123.8	14	114.3	14	117.1	9	109.3	25	115.7	66	122.2
48	上顔高	76	114	74.8	23	64.9	17	68.1	10	62.2	28	66.3	92	71.8
47/45	顔示数（K）	-	71	88.4	6	81.5	12	84.6	7	79.9	10	80.4	64	91.4
47/46	顔示数（V）	-	74	118.4	10	113.0	14	111.8	7	111.6	18	110.4	65	122.2
48/45	上顔示数（K）	55.1	95	53.3	7	45.9	12	49.3	7	45.6	10	47.0	90	53.5
48/46	上顔示数（V）	-	105	71.5	13	62.8	17	64.8	8	63.4	22	63.1	91	71.8
51	眼窩幅（左）	44	89	43.2	21	43.1	15	43.1	8	43.1	40	43.2	108	43.0
52	眼窩高（左）	33	93	34.5	26	33.0	15	32.8	9	31.8	38	33.2	108	34.4
52/51	眼窩示数（左）	75.0	86	79.9	21	77.0	15	76.2	8	74.2	32	77.5	108	80.2
54	鼻幅	25	117	27.1	26	27.5	16	27.8	10	26.1	36	26.5	108	25.9
55	鼻高	(55)	116	52.8	25	50.2	16	51.0	10	45.2	30	48.1	108	52.2
54/55	鼻示数	45.6	113	51.4	24	54.9	16	54.4	9	57.0	27	54.7	108	49.8

1）中橋・永井(1989) 2）内藤(1985) 3）内藤（1971）4）中橋(2003) 5）清野・宮本（1926）、金高（1928）6）原田(1954)

表3　主要頭蓋計測値の比較（女性）

		藤崎32（弥生）		北部九州1)（弥生）		土井ケ浜2)（弥生）		西北九州3)（弥生）		広田4)（弥生）		津雲・古浦5)（縄文）		西南日本6)（現代）	
		4	96	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	頭蓋最大長	176	179	86	177.0	32	176.0	15	178.1	18	157.7	46	176.1	57	172.8
8	頭蓋最大幅	138	141	84	138.4	32	138.1	15	139.3	17	143.7	49	141.5	57	134.0
17	Ba-Br高	-	133	66	130.7	29	128.1	7	127.3	7	127.7	21	129.7	57	131.3
8/1	頭長幅示数	78.4	78.8	72	78.1	30	78.5	15	78.2	15	90.9	41	80.3	57	77.6
17/1	頭長高示数	-	73.3	62	74.1	28	72.8	7	71.2	6	80.5	20	73.6	57	76.0
17/8	頭幅高示数	-	94.3	56	94.9	29	92.8	7	92.5	7	90.4	20	91.9	57	98.0
45	頬骨弓幅	(134)	129	61	131.3	20	131.9	6	130.2	3	126.0	10	132.6	57	123.9
46	中顔幅	-	94	67	99.8	23	98.5	11	95.9	5	91.4	23	99.7	57	93.4
47	顔高	-	114	45	116.3	23	114.2	9	104.9	3	107.0	14	105.1	14	112.9
47	上顔高	-	66	66	70.1	22	68.3	12	60.9	3	63.3	17	62.0	55	68.2
47/45	顔示数（K）	-	88.4	34	88.7	17	86.6	6	81.7	2	81.9	7	79.2	14	90.8
47/46	顔示数（V）	-	121.3	39	116.7	21	115.9	9	109.5	3	112.3	13	106.8	14	119.0
48/45	上顔示数（K）	-	51.2	49	53.7	17	51.8	6	47.6	2	48.8	7	48.0	55	55.0
48/46	上顔示数（V）	-	70.2	57	70.2	21	69.3	11	63.5	3	66.5	14	62.3	55	72.9
51	眼窩幅（左）	40	41	66	41.6	24	40.3	10	41.1	3	39.0	22	41.7	57	40.5
52	眼窩高（左）	34	33	65	34.1	25	33.3	10	31.2	3	30.7	14	32.6	57	34.0
52/51	眼窩示数（左）	85.0	80.5	62	82.0	24	82.6	10	75.9	3	78.9	13	78.0	57	83.9
54	鼻幅	-	25	72	26.6	20	26.0	12	26.6	4	24.8	27	25.4	57	25.0
55	鼻高	49	46	71	49.8	23	49.0	12	46.3	3	44.7	21	44.9	57	48.6
54/55	鼻示数	-	54.3	69	53.5	20	53.0	12	57.4	3	57.5	20	56.1	57	51.4
72	全側面角	-	-	48	83.5	22	83.6	10	81.5	3	84.7	12	81.5	55	83.0
74	歯槽側面角	-	-	47	67.9	22	70.5	-	-	3	65.7	13	68.7	55	67.1

1）中橋・永井(1989) 2）金関、他(1960) 3）内藤(1985) 4）中橋(2003) 5）清野・宮本（1926）金高（1928）6）原田(1954)

表 4　上肢骨計測値（女性、左）

		藤崎32（弥生）		北部九州1)（弥生）		大友2)（弥生）		広田3)（弥生）		津雲4)（縄文）		九州5)（現代）	
		4	96	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
上腕骨													
1	最大長	–	–	11	283.2	4	262.3	3	253.3	21	264.4	36	271.7
2	全　長	–	–	8	282.3	4	257.8	3	251.3	19	259.6	36	268.6
5	中央最大径	21	19	35	21.0	20	21.0	2	22.0	40	19.7	36	19.8
6	中央最小径	17	16	36	15.3	20	15.8	2	15.5	41	14.0	36	14.8
7	骨体最小周	56	53	47	56.9	19	57.6	14	54.2	42	53.9	36	54.8
7a	中央周	62	58	33	60.7	19	61.8	2	63.0	40	56.5	36	56.9
6/5	骨体断面示数	81.0	84.2	35	73.2	20	75.9	2	70.5	40	71.3	36	75.3
7/1	長厚示数	–	–	11	19.8	11	22.4	2	23.4	21	20.4	106	20.9
橈骨													
1	最大長	–	–	17	215.1	2	207.0*	2	201.0	24	208.2	12	199.2
2	機能長	–	–	11	204.3	2	194.0*	2	189.5	26	196.4	12	187.0
3	最小周	38	32	52	37.9	9	40.4	5	36.0	30	36.4	12	34.7
4	骨体横径	16	15	56	15.7	11	16.4	8	14.8	34	14.6	12	14.5
4a	骨体中央横径	–	–	24	14.3	11	15.9	2	14.5	–	–	12	13.5
5	骨体矢状径	11	10	56	10.9	11	11.2	9	10.0	34	9.8	12	9.7
5a	骨体中央矢状径	–	–	24	10.8	12	10.9	2	11.0	–	–	12	9.7
3/2	長厚示数	–	–	11	17.7	2	19.7*	2	20.0	25	18.2	11	18.1
5/4	骨体断面示数	68.8	66.7	56	69.3	11	68.7	8	67.9	34	67.5	10	68.3
5a/4a	中央断面示数	–	–	24	75.7	11	69.7	2	75.9	–	–	–	–
尺　骨													
1	最大長	–	–	6	236.5	1	223.0	2	215.5	12	227.2	12	215.0
2	機能長	–	–	8	207.6	2	207.0	1	191.0	12	198.6	12	189.2
3	最小周	34	31	34	34.4	7	33.9	4	31.3	24	32.8	12	32.1
11	矢状径	13	10	54	11.2	12	12.8	10	10.7	37	11.3	12	10.9
12	横　径	17	14	54	16.0	11	15.9	10	15.2	37	13.6	12	13.9
3/2	長厚示数	–	–	7	16.5	2	16.7	1	17.3	12	16.4	12	16.8
11/12	骨体断面示数	76.5	71.4	54	70.4	11	82.0	10	70.7	37	83.5	12	77.5

1)中橋・永井(1989)　2）松下（1981）　3）中橋(2003)　4）池田（1988）　5）専頭(1957)・溝口（1957）

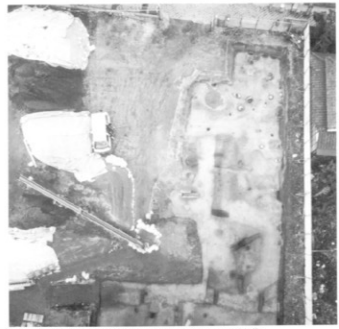
表 5　下肢骨計測値（女性、左）

		藤崎32（弥生）		北部九州（弥生）		大友（弥生）		広田（弥生）		津雲（縄文）		九州（現代）	
		4	96	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨													
1	最大長	–	(393)	34	405.5	5	386.8	5	356.8	22	388.2	13	380.1
2	自然位長	–	–	11	403.0	4	378.3	5	361.2	22	381.7	13	375.9
6	中央矢状径	24	23	112	25.7	30	25.5	20	22.5	45	25.2	13	23.6
7	中央横径	28	27	112	26.3	30	25.2	20	23.0	45	24.2	13	23.2
8	中央周	81	78	111	81.5	29	80.4	18	72.2	45	78.0	13	74.2
9	骨体上横径	32	32	86	30.5	30	29.7	18	27.3	42	28.4	13	27.5
10	骨体上矢状径	22	20	86	23.2	30	22.7	18	20.2	42	22.2	13	21.3
8/2	長厚示数	–	–	11	20.8	4	20.3	5	20.2	21	20.3	13	19.8
6/7	中央断面示数	85.7	85.2	112	98.3	31	102.1	20	97.8	45	104.5	13	102.0
10/9	上骨体断面示数	68.8	62.5	86	76.4	30	76.5	18	73.9	42	78.2	13	77.1
脛骨													
1	全　長	–	–	20	324.3	3	313.0	5	302.4	17	319.8	14	301.0
1a	最大長	–	323	30	329.3	4	324.8	5	305.2	17	324.4	14	306.6
8	中央最大径	–	25	46	27.0	24	27.6	6	25.5	42	27.3	14	24.7
8a	栄養孔位最大径	31	29	97	30.8	19	30.4	13	28.5	37	30.5	14	28.1
9	中央横径	–	19	46	20.4	26	19.7	6	19.0	42	17.9	14	18.8
9a	栄養孔位横径	21	21	98	22.3	20	21.1	13	20.2	36	19.4	14	21.1
10	骨体周	–	69	46	74.5	23	75.3	6	70.7	42	73.4	14	70.1
10a	栄養孔位周	81	78	96	83.2	18	81.6	13	76.9	35	81.3	14	78.2
10b	最小周	69	62	132	68.6	24	68.3	11	63.7	35	67.6	14	63.6
9/8	中央断面示数	–	76.0	46	75.7	23	72.1	6	74.6	42	65.8	14	76.3
9a/8a	栄養孔位断面示数	67.7	72.4	97	72.4	18	70.4	13	71.2	36	63.6	14	74.9
10b/1	長厚示数	–	–	20	21.3	3	21.4	5	21.2	17	21.1	14	21.2
腓骨													
1	最大長	–	–	2	328.0	–	–	2	297.5	8	316.9	14	300.6
2	中央最小径	–	17	34	14.7	–	–	4	12.8	32	14.7	14	12.9
3	中央最小径	–	9	34	9.8	–	–	4	9.5	32	10.0	14	8.6
4	中央周	–	42	34	40.7	–	–	5	35.8	32	42.8	14	36.8
4a	最小周	–	32	8	35.6	–	–	3	32.3	20	34.0	14	32.3
3/2	中央断面示数	–	52.9	34	67.3	–	–	4	74.9	32	68.3	14	67.6
4a/1	長厚示数	–	–	2	10.8	–	–	2	11.3	8	11.0	14	10.8

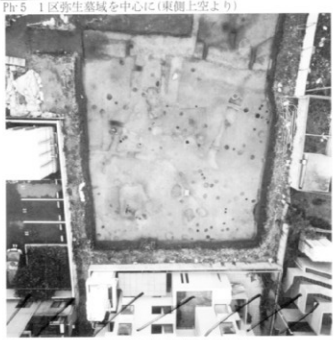
Ph 3．1区弥生堆積(東から)

Ph 4．2区(西から)中央に2号周溝

Ph.5　1区弥生墓域を中心に(東側上空より)



Ph.7　2区全景(南側上空より)中央右に2号周溝



Ph.6　3区下面(南側上空より)左上に3号周溝

Ph.8　SK012　1号周溝主体部(北から)

Ph.9 1号周溝SD001上層(東から)

Ph.10 SD001完掘状況(西から)

Ph.11 1号周溝SD010完掘状況(西から)

Ph.12 SK012 1号周溝主体部攪乱土除去時(北から)

Ph.13 2号周溝(南から)

Ph.14 SK215 2号周溝主体部か(南から)

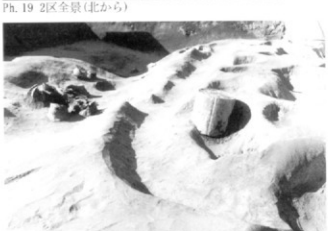
Ph.15 SK237 2号周溝内(東から)

Ph.16 SD063 3号周溝(南西から)

Ph. 17 調査区遠景(北東から)

Ph. 18 I区弥生時代墓域(東から)

Ph. 19 2区全景(北から)



Ph. 20 SD047 弥生区画溝か(北東から)

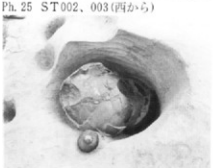
Ph. 21 ST004人骨出土状況

Ph. 22 ST013人骨出土状況

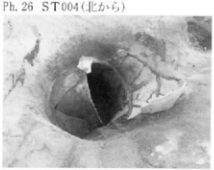
Ph. 23 ST096人骨出土状況

Ph. 24 ST207人骨出土状況

Ph. 25 ST002、003(西から)



Ph. 26 ST004(北から)



Ph. 27 ST007(南西から)

Ph. 28 ST008(南から)

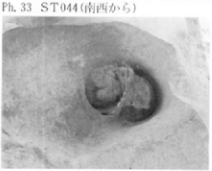
Ph. 29 ST009(北から)

Ph. 30 ST016(東から)

Ph. 31 ST038(東から)

Ph. 32 ST039(西から)

Ph. 33 ST044(南西から)

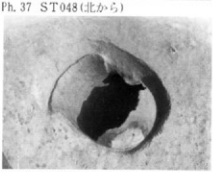


Ph. 34 ST045(南西から)

Ph. 35 ST046(南から)

Ph. 36 ST046(北から)

Ph. 37 ST048(北から)



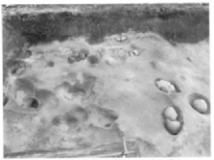
Ph. 38 ST052(南西から)

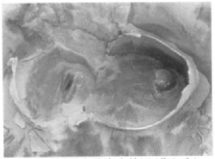
Ph. 39 ST057(北から)

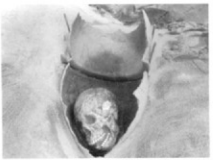
Ph. 40 SD010内壺棺出土状況(北から)

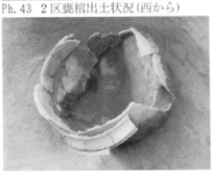
Ph. 41 SD010出土壺棺(東から)

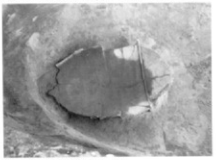
Ph. 42 SD047 弥生区画溝か(西から)


Ph. 43　2区甕棺出土状況(西から)

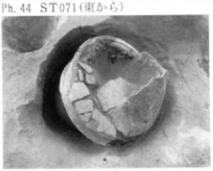

Ph. 49　ST093人骨出土状況(北から)

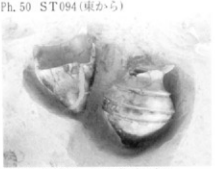

Ph. 55　ST207人骨出土状況(西から)

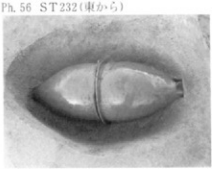

Ph. 44　ST071(東から)

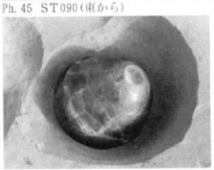

Ph. 50　ST094(東から)

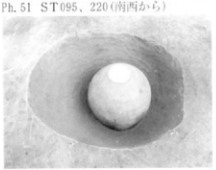
Ph. 56　ST232(東から)

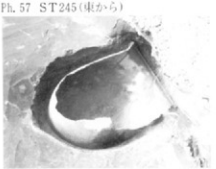

Ph. 45　ST090(東から)

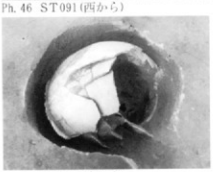

Ph. 51　ST095、220(南西から)

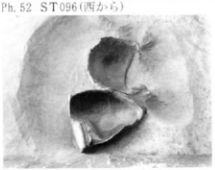

Ph. 57　ST245(東から)


Ph. 46　ST091(西から)


Ph. 52　ST096(西から)


Ph. 58　ST249(南東から)


Ph. 47　ST092(南から)


Ph. 53　ST205、206(東から)

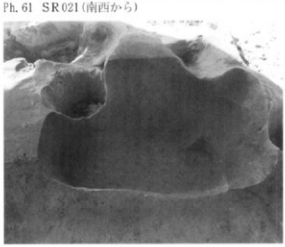
Ph. 59　ST250(北西から)

Ph. 48　ST093(北から)

Ph. 54　ST208(北から)

Ph. 60　2、3区全景(西から)

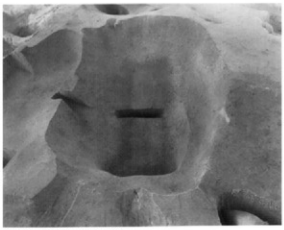
Ph. 61　SR021(南西から)



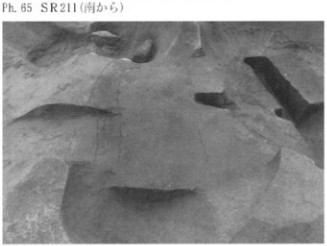
Ph. 62　SR026(北から)

Ph. 63　SR037(東から)

Ph. 64　SR060(東から)



Ph. 65　SR211(南から)



Ph. 66　SR237(南から)

Ph. 67　SR238(西から)

Ph. 68　SQ018(東から)

Ph. 69　3区上面全景(北西から)

Ph. 70　SC058(南東から)

Ph. 71　SC116(北から)

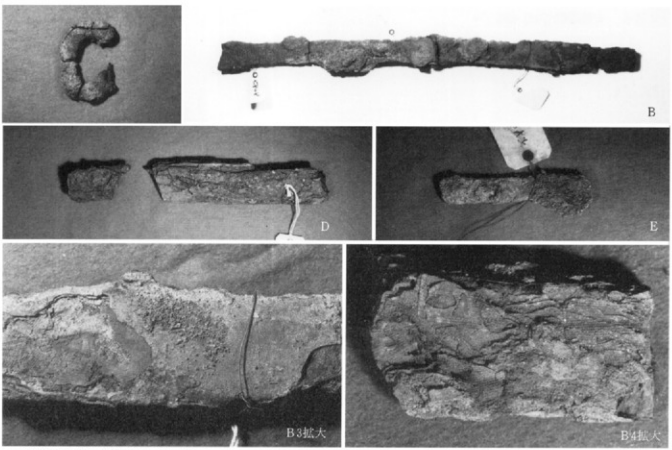
Ph. 72　SC116カマド(北から)

Ph. 73　SC150(南から)

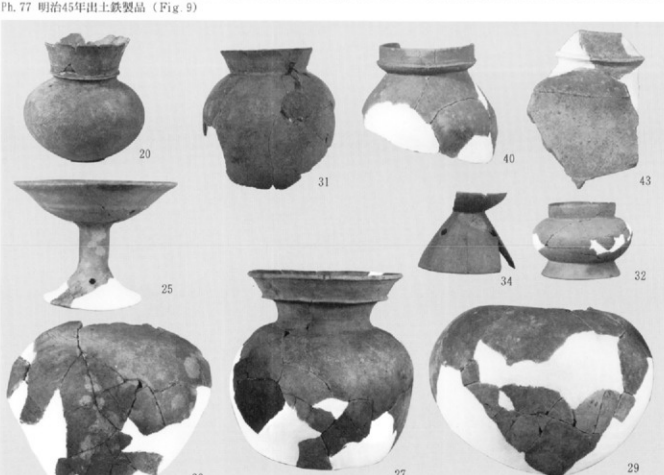
Ph. 74　SD080(西から)

Ph. 75　SD019(西から)手前に弥生溝の屈曲部？

Ph. 76　SDD035土層Fig. 42(西から)

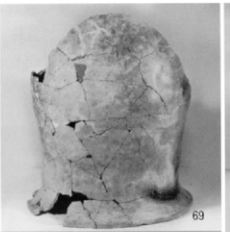


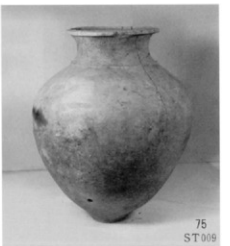
Ph. 77 明治45年出土鉄製品（Fig. 9）



Ph. 78 周溝出土土器

49
ST002


69


75
ST009

91
ST003

70
ST007

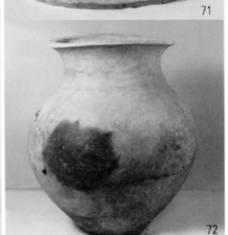
52
ST013

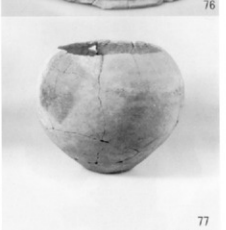
50

71

76

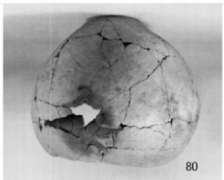
51
ST004


72
ST008


77
ST016

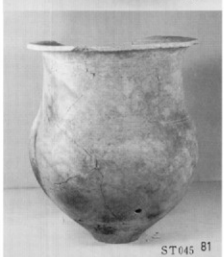
Ph. 79　出土甕棺 1

74
ST038

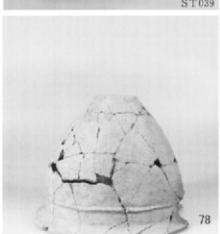

80

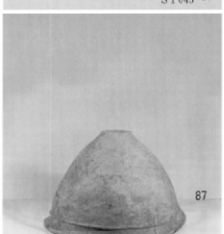
82

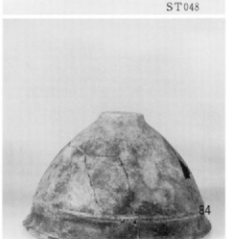
56
ST039


ST045 81

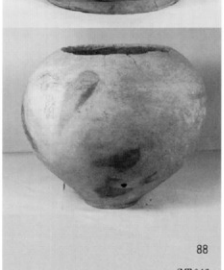
83
ST048


78


87


84

79
ST044


88
ST045

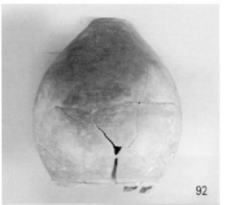
85
ST057

Ph. 80　出土甕棺 2

59
ST052

89

90
ST091

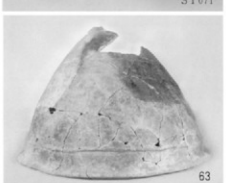

92

93
ST093

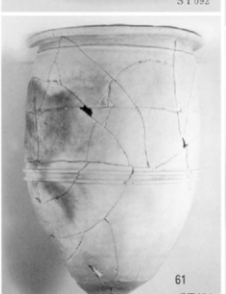
55
ST071

65
ST092

94
ST095

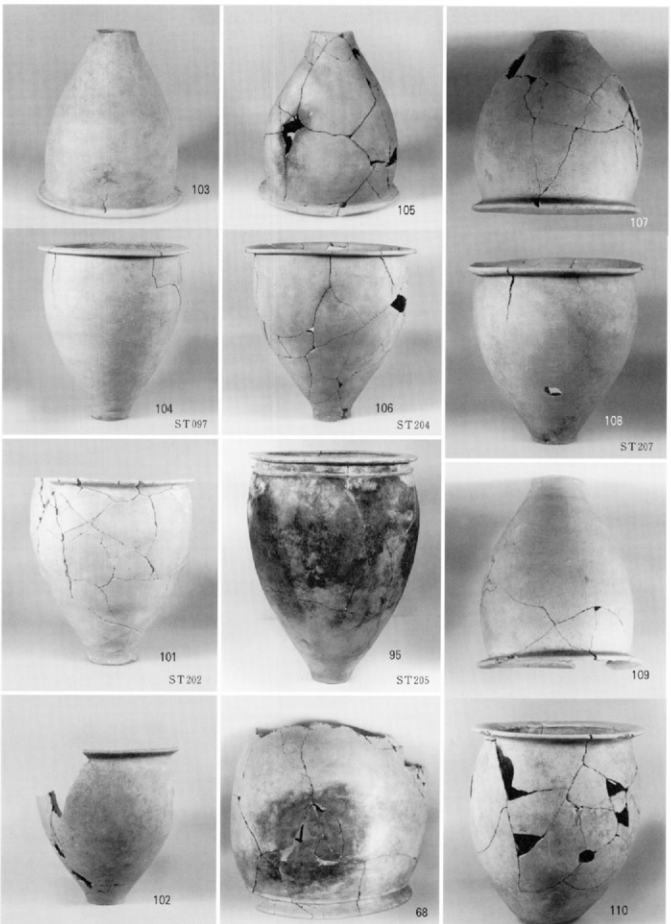

63

64
ST090


61
ST094

66
ST096

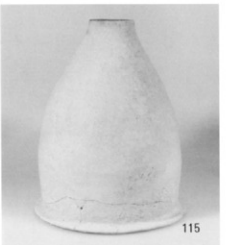
Ph.81 出土遺構3


103
105
107
104
ST097
106
ST204
108
ST207
101
ST202
95
ST205
109
102
ST203
68
ST206
110
ST208

Ph. 82 出土窯棺 4

111

113


115

112 ST217

114 ST225

116 ST245

96

98

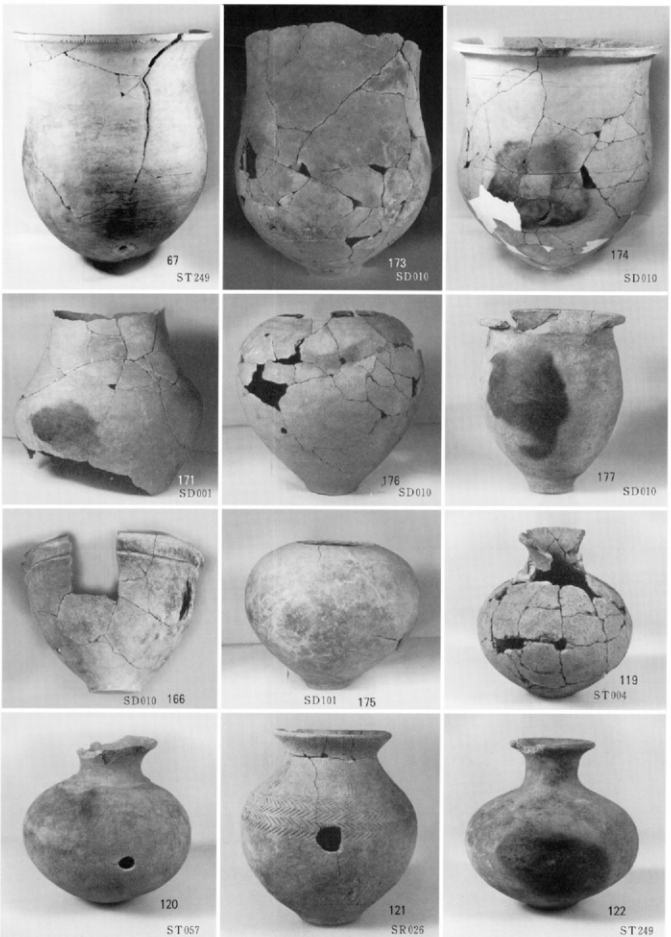
117

97 ST220

99 ST232

118 ST246

Ph. 83 出土甕棺 5



Ph. 84　出土甕棺6・副葬小壺

123
SR021

183
SD001

185
SD001

220
SK303

306
SC058

124
ST038

125～140他
ST071

SK237出土鉄鉄

Ph.85　副葬遺物他

報告書抄録
書名ふりがな　ふじさきいせき15
書名　藤崎遺跡15
副書名　藤崎遺跡第32次調査
巻次
シリーズ名　福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号　824
編著者名　池田祐司/久住猛雄
編集機関　福岡市教育委員会
発行機関　福岡市教育委員会
発行年月日　20040331
作成法人ID　40137
郵便番号　810-8621　　電話番号　092-711-4667
住所　福岡市中央区天神1-8-1
遺跡名ふりがな　ふじさき
遺跡名　藤崎遺跡第32次
所在地ふりがな　ふくおかしさわらくふじさき
遺跡所在地　福岡市早良区藤崎一丁目1-1、1-2
市町村コード 40137　　遺跡番号
北緯　33° 33′ 44″（世界測地系）
東経　130° 20′ 24″
調査期間　20021001 - 20030131
調査面積　1101
調査原因　共同住宅建設
種別　墓地、集落
主な時代　縄文/弥生/古墳/古代/中世
遺跡概要　散布地-縄文-黒色磨研土器/墓地-弥生-甕棺43＋木棺墓-土壙墓17＋石棺墓１/古墳-周溝墓3＋住居７-須恵器＋土師器/中世-溝2-土師器＋陶磁器/近世-土坑/近代-土坑
特記事項
１号周溝墓は明治４５年に三角縁複波文帯盤龍鏡、素環頭太刀等が出土した箱式石棺墓と考えられる。

藤崎遺跡 15
福岡市埋蔵文化財調査報告書第824
2004年（平成16年）３月31日
発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号
(092) 711－4667
印刷　有限会社アイオー企画印刷
福岡市南区檜原２丁目３番10号

藤崎遺跡15

福岡市埋蔵文化財調査報告書第824集

2004

福岡市教育委員会